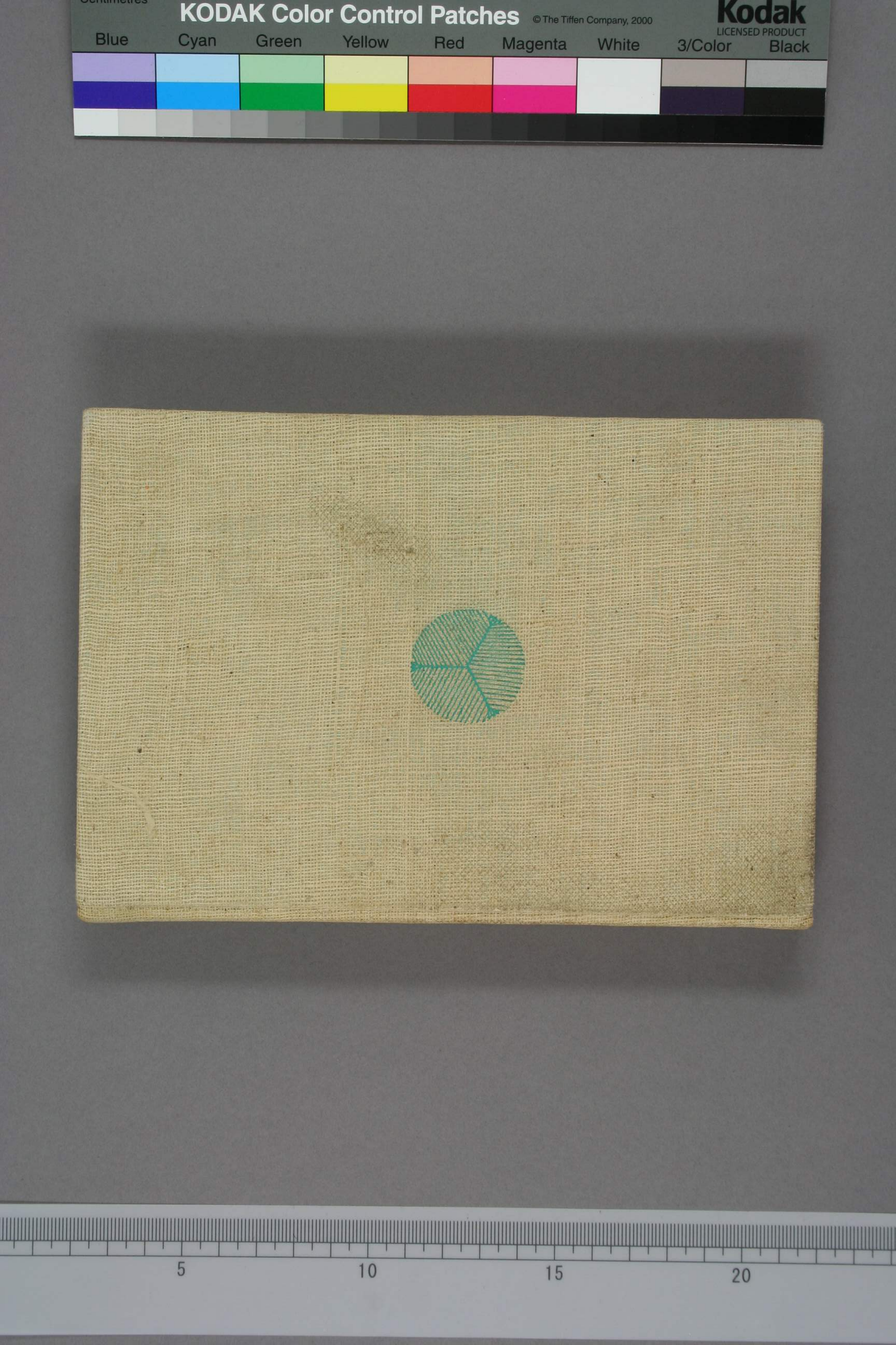
雪と花火

北原白秋著

詩集

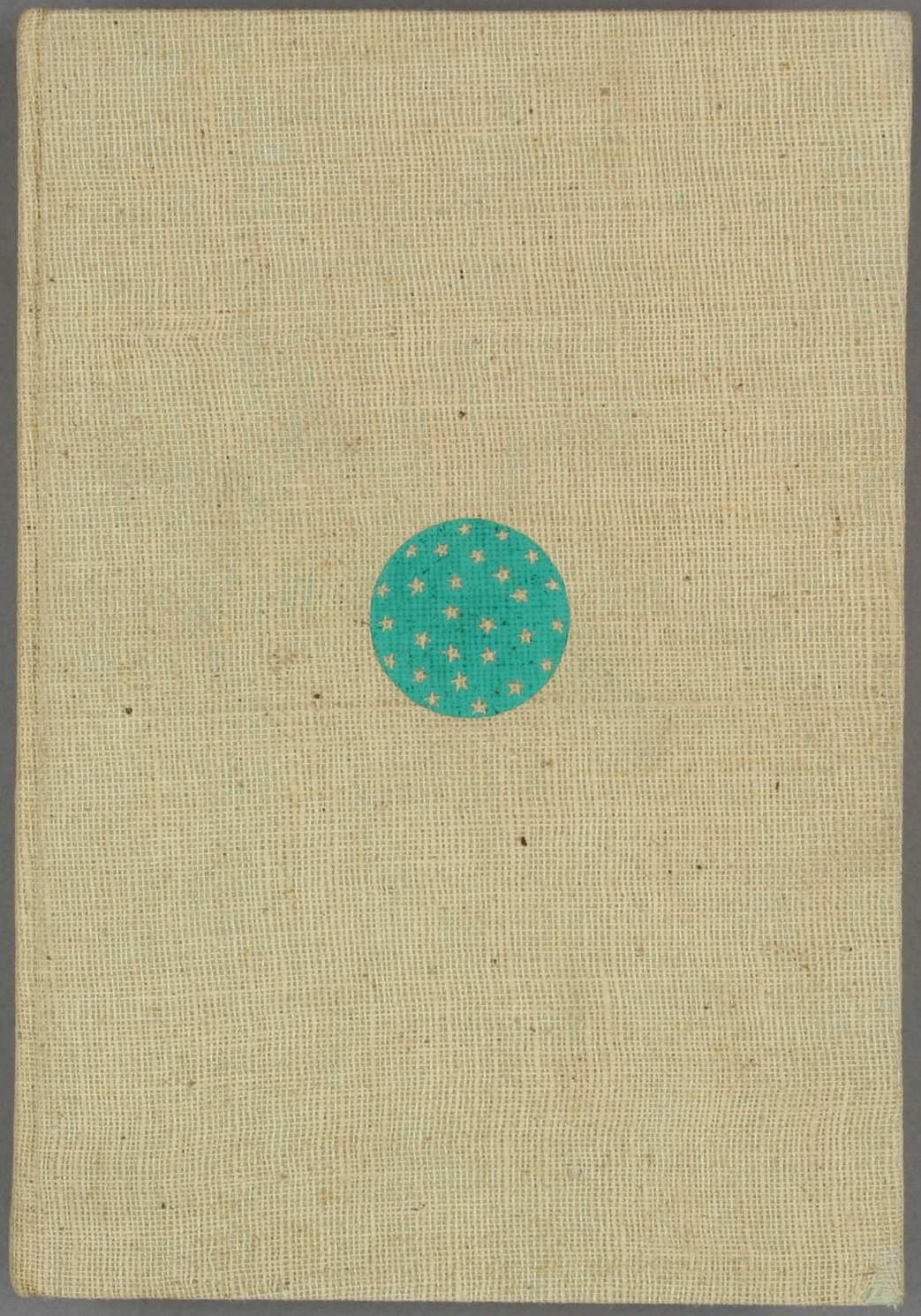
雪と花火

北条白秋


KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
5
10
15
20

神とそれ以外

著者 北原白秋



NANYODO BOOK-STORE
MOTOMACHI HONGO
TOKYO
南陽堂本店

火花と雪

詩物景京東

幀裝及著秋白原北
版出店書堂雲東 京東
年五正大

わかき日の饗宴を忍びてこの怪しき黄と緑との
詩集を〝PAN〟とわが「屋上庭園」の友にささぐ

TORE
NGO
D

TORE
NGO

東京夜曲

東京夜曲

公園の薄暮

ほの青き銀色の空氣に、
そことなく噴水の水はしたたり、
薄明ややしばしさまかえぬほど、
ふくらなる羽毛頸卷のいろなやましく女ゆき
かふ。

つつましき枯草の濕るにほひよ……

圓形に、あるは楕圓に、
劃られし園の配置の黄にほめき、靄に三つ四つ
色淡き紫の弧燈したしげに光うるほふ。

春はなほ見えねども、園のこころに
いと甘き沈丁の苦き莟の
刺すがごと沁みきたり、瓦斯の薄黄は
身を投げし靈のゆめのごと水のほとりに。

暮れかぬる電車のきしり……

凋れたる調和にぞ修道女の一人消えさり、
裁判はてし控訴院に留守居らの點す燈は
疲れたる硝子より弊私的里の瞳を放つ。

いづこにかすずろげる春の暗示よ……
陰影のそここに、やや強く光劃りて
息ふかき弧燈枯くさの園に歎けば、
面黄なる病兒幽かに照らされて迷ひわづらふ。

朧げのつつましき匂のそらに、

なほ妙にしだれつつ噴水の吐息したたり、
新しき月光の沈丁に沁みも冷ゆれば
官能の薄らあかり銀笛の夜とぞなりぬる。

四十二年二月

鶯の歌

なやましき鶯のうたのしらべよ……
ゆく春の水の上、靄の廂合、
凋れたる官能の、あるは、青みに、
夜をこめて靈の音をのみぞ啼く。

鶯はなほも啼く……瓦斯の神經
酸のごと饐えて顫ふ薄き硝子に、

失ひし戀の通夜、さりや、少女の
青ざめて熟視めつつ闌くる瞳に。

憂鬱症の靈の病めるしらべよ……
コルタアの香の屋根に、船のあかりに、
朽ちはてしおはぐろの毒の面に
愁ひつつ、にほひつつ、そこはかとなく。

井オロンの三の絃摩るこころか、
ていほろと梭の音たつるゆめにか、

寢ねもあへぬ鶯のうたのそそりの
かつ遠み、かつ近み、靜こころなし。

夜もすがら夜もすがら歌ふ鶯……
月白き芝居裏、河岸の病院、
なべて夜の疲れゆくゆめとあはせて、
ウキスラアーの靄の中音に鳴き鳴きてそこは
かとなし。

四十二年一月

夜の官能

濕潤ふかき藍色の夜の暗さ……
酸のごとき星あかりさだかにはそれとわかねど
濃く淡き溝渠の陰影に、
青白き胞衣會社ほのかにほひ、
窓多く、而もみな閉したる眞四角の煙艸工場の
煙突の黑みより灰ばめる煤と湯氣なびきちら

ぼふ。

橋のもと、暗き沈默に
舟はゆく……
なごやかにうち靑む砥石の面を
いと重き刷刀の音もなく辷るごとくに、
舟はゆく……ゆけど聲なく
ありとしも見えわかぬ棹取の杞憂深げに、
ただ黃なる燈火ぞのぼりゆく……孤兒の頼り
なき眼か。

つつましき尿の香の滲み入るほとり、
腐れたる酒類の澱み濁りて
そこここの下水よりなやみしみたり、
白粉と湯垢とのほめく闇にも
青き芽の春の草かすかににほふ。
濕潤ふかき藍色の夜の暗さ……
かへりみすれば
いと黑く、はた、遠き橋のいくつの

そのひとつ青うきしろひ、
神經の衰弱にぞ絶間なく電車過ぎゆき、
正面なる新橋の天鵝絨の空の深みに
さまざまの電氣燈の裝飾、
そを脱けて紫の弧燈にほやかにひとつ濕れる。
あはれ、あはれ、爛壞のまへの官能のイルユミネ
エション。

しかはあれども、
濕潤ふかき藍色の夜の暗さ……

溝渠の闇の中病院の舟は消えゆき、
青白き胞衣會社にほふあたりに、
整はぬ鶯ぞしみらにも鳴きいでにける。

四十二年三月

片戀

あかしやの金と赤とがちるぞえな。
かはたれの秋の光にちるぞえな。
片戀の薄着のねるのわがうれひ
「曳舟」の水のほとりをゆくころを。
やはらかな君が吐息のちるぞえな。
あかしやの金と赤とがちるぞえな。

四十二年十月

露臺

やはらかに浴みする女子のにほひのごとく、
暮れてゆく、ほの白き露臺のなつかしきかな。
黄昏のとりあつめたる薄明
そのもろもろのせはしなきどよみのなかに、
汝は絶えず來る夜のよき香料をふりそそぐ。
また古き日のかなしみをふりそそぐ。

汝がもとに兩手をあてて眼病の少女はゆめみ、
欝金香くゆれるかげに忘られし人もささやく、
げに白き椅子の感觸はふたつなき夢のさかひに、
官能の甘き頸を捲きしむる悲愁の腕に似たり。

いつしかに、暮るとしもなき窓あかり、
七月の夜の銀座となりぬれば
靜こころなく呼吸しつつ、柳のかげの
銀綠の瓦斯の點りに汝もまた優になまめく、

四輪車の馬の臭氣(にほひ)のただよひに黄なる夕月
もの甘き花梔子(くちなし)の薫(くゆり)してふりもそそげば、
病める兒のこころもとなきハモニカも物語(レヂエンド)の
なかに起りぬ。

四十二年七月

S組合の白痴

雜艸園

惱ましき黄の妄想の光線と、生物の冷き愁と、——
靈の雜艸園の白日はかぎりなく傷ましきかな。
たとふればマラリヤの病室にふりそそがれし
香水と消毒劑と、……窓の外なる蜜蜂の巣と、…
そのなかに絶えず恐るる弊私的里の看護婦の
眼と、
霖雨後の黄なる光を浴びて蒸す四時過ぎの歎

に似たり。

見よ、かかる日の眞晝にして
氣遣はしげに點りたる瓦斯の火の病める瞳よ。
かくてまた蹈み入りがたき雜艸の最も淫れし
あるものは
肥滿りたる、頸輪をはづす主婦の腋臭の如く蒸
し暑く、
悲しき莖のひと花のぺんぺん草に縋りしは、

藥瓶もちて休息める雜種兒の公園の眼をおも
はしむ。
また、緩やかに夢見るごときあるものは、
午後二時ごろの Café に Verlaine のあるごとく、
ことににくきは日光が等閑になすりつけたる
思ひもかけぬ、物かげの新しき土の色調。
またある草は白猫の柔毛の感じ忘れがたく、
いとふくよかに温臭き殘香の中に吐息しつ。
石鹸の泡に似て小さく、簇り青むある花は
ひと日浴みし肺病の女の肌を忍ぶごとく、

洋妾めける雁來紅は
吸ひさしの卷煙草めきちらぼひてしみらに薫
ゆる
朝顏の萎みてちりし日かげをば見て見ぬごと
し。

見よ、かかる日の眞晝にして
氣遣はしげに瞬ける瓦斯の火の病める瞳よ。
あるものは葱の畑より忍び來し下男のごとく、

またあるものは轢かれむとして助かりし公證
人の女房が
甘蔗のなかに靑ざめて佇むごとき匂しつ。
ことに正しきあるものはかかる眞晝を
饐え白らみたる烏屋の外に交接へる鷄をうち
目守る。

噫、かかるもろもろの匂のなかにありて
藥草の香はひとしほに傷ましきかな、
哀れ、そは三十路女の面もちのなにとなく淋し

きごとく、
活動寫眞の小屋にありて悲しき銀笛の音の消
ゆるに似たり。

見よ、かかる日の眞晝にして
氣遣はしげに黄ばみゆく瓦斯の火の病める瞳
よ。

あはれ、また
知らぬ間に懶きやからはびこりぬ。

ここにこそ恐怖はひそめ。かくてただ盲人の
親は寢そべり、
剃刀持てる白痴兒は匍匐ひながら、
こぼれたる牛乳の上を、毛氈を、近づき來る思あ
り。
またその傍に、なにとも知れぬ匂して、
詮すべもなく降りゆく、さあれ樂しくおもしろ
き
やぶれかかりし風船の籠に身を置く心あり。
あるは、また、かげの濕地に精液のにほひを放つ

草もあり。

見よ、かかる日の眞晝にして
氣遣しげに青ざめし瓦斯の火の病める瞳よ。

惱ましき黄の妄想の光線と、生物の冷き愁と、
靈の雜艸園の白日の聲もなきかがやかしさを、
時をおき、搖り轟かし、黑烟たたきつけつつ、
汽車飛び過ぎぬ、かくてまたなにごともなし……。

四十二年十月

瞰望

わが瞰望は
ありとあらゆる悲愁の外に立ちて、
東京の午後四時過ぎの日光と色と音とを怖れたり。

七月の白き眞晝、
空氣の汚穢うち見るからにあさましく、

いと低き瓦の屋根の一圓は卑怯に鈍く黄ばみたれ、

あかあかと屋上園に花置くは雜貨の店か、

(新嘉坡の土の香は莫大小の香とうち咽ぶ。)

また、青ざめし羽目板の安料理屋の窓の内、

ただ力なく、女は頸かたむけて髪梳る。

(私生兒の泣く聲は野菜とハムにかき消さる。)

洗濯屋の下女はその時に物干の段をのぼり了り、

男のにほひ忍びつつ、いろいろのシャツをひろ

げたり。

九段下より神田へ出づる大路には

しきりに急ぐ電車をば四十女の酔人の來て止めたり。

斜かひに光りしは童貞の帽子の角か。

かかる間も收まり難き困憊はとりとめもなく

うち歎く。

その濕めらへる聲の中

覇王樹の蔭に蹲みて日向ぼこせる洋館の病兒
の如く泣くもあり。
煙艸工場の煙突掃除のくろんぼが通行人を罵
る如き聲もあり。
白晝を按摩の小笛、
午睡のあとの倦怠さに雪駄ものうく
白粉やけの素顏して湯にゆくさまの藝妓あり。
交番に巡査の電話、
廣告の道化うち靑みつつ火事場へ急ぐごとき
あり。

また間の抜けて淫らなる支那學生のさへづり
は
氷室の看板かけるペンキのはこび眺むるごと
く、
印刷の音の中、色赤き草花凋え、
ほどちかき外科病院の裏手の路次の門彈は
げにいかがはしき病の臭氣こもりたり。
(いま妄想の疲れより、ふと起りたる
藥種屋内の人殺、

下手人は色白き去勢者の母。)

何かは知らず、

人かげ絶えてただ白き裏神保町の眼路遠く、

肺病の皮膚青白き洋館の前を疲れつつ、

「刹那」の如く横ぎりし電車の胴の白色は一瞬に

して隱れたり。

いたづらに玩弄品の如き劇場の壁薄あかく、

ところどころの窓の色、曇れる、あるはやや黄な

る、

弊私的里性の薄青き、あるは閉せる、

見るからに温室の如き寫眞屋に畫の瓦斯つき、

(亡き人おもふ哀愁はそこより來る。)

獸醫の家は家畜の毛もていろどられ、

齒科病院の帷は入齒のごとき色したり、

その眞中にただひとつ、研ぎすましたる悲愁か、

冷き理髮の二階より、

剃刀の如く閃々と銀の光は瞬けり。

あらゆるものの疲れたる七月の午後、

わが瞰望の凡ての色と音と光を壓すごとく、
凡ての上にうち顯る「東京の青白き墳墓」
ニコライ堂の内秘より、薄闇き圓頂閣を越えて
大釣鐘は騷がしく靈の内と外とに鳴り響く。
鳴り響く、鳴り響く、……

四十二年十月

心とその周圍

一　窓のそと

1

わが窓のそと、
黄なる實のおよんどんのちまめは小さなる光
の簇をつくり、
葉かげの水面は銀色の靜寂を織る。

白くして惱める眼鏡橋のうへを
鐵輪を走らしつつ外科醫院の兒は過ぎゆき、
氣の狂ひたる助祭は言葉なく歩み來る。

鐘を撞け、鐘を撞け、
恐ろしき銀色の鐘を……

この時、近郊を殺戮したる白人の一揆は
更にこの靜かにして小さなる心の領内を犯さ
んとし、

すでにその鎗尖のかがやきはかなたの丘の上
に閃めけり。

正午過ぎ……一分……二分……三分……
日は光り、そよとの風もなし。

2

ある日、わが窓の硝子のしたに、
覆されたる蜜蜂の大きなる巣激しく臭ひ、
その周圍に數かぎりなき蜂の群音たてて光り

かがやき、
粗末なる木の函へすべり入り、匍ひめぐる。
かがやかしき歡喜と悲哀！
すべてこの銀色の光のなかに
太くしてむくつけき黑人の手ぞ
働ける……甘き甘きあるものを搔きいださん
とするがごとく。

その前に負傷したる敵兵三人、——
あるものは白き布にて右の腕を吊したり——

日に燒けたる絕望の顏をよせて
そこはかとなきかかる日の鄕愁に惱むがごと
く
珍かにうち眺めたる……足もとの黃色なる花
濕りたる土の香のさみしさに晷りつつうち凋
る。

鐘は鳴る……銀色の敎會の鐘……
硝子窓のなかには

薄色の青き眼がねをかけたる女、
かりそめのなやみにほつれたる髪かきあげて、
薬罐載せたる圓卓のはしに肱つきながら
金字見ゆるダンヌンチオの稗史を閉し、
靜かなる杏仁水のにほひにしみじみときき惚
れてあり。

ああ午後三時の郷愁……

II　S組合の白痴

夕まぐれ、石油問屋のS組合の入口に、
つめたき硝子戸のそと、
うち潤る石油色の影陰の中、薄ら光る銀の引手
のそばに
薄白痴のわかきニキタは紫の絹ハンケチを頸
にむすび、
今日もまたのんべりだらりと立ん坊の河岸の
便所に凭るごとく、

のろまな
その鈍き容態のいづこにか猾き眼を働らかせ
にやにやと笑ひつつあり。
日は向う河岸の家畜病院の頽れたる露臺を染め、
入口の硝子戸の前に藥塗らるる色黄なる狂犬を染め、
隣れる健胃固腸丸の廣告に苦き光を殘しつつ
沈みゆく。

S組合の薄白痴は
石油ににじむ赤き髪に雜種兒の矜を思ひ、
けふの夜食も燒パンにジャムと牛乳を購はん
とぞ思ふ。
かかる間も白銅のこひしさに
通りすがる肥滿女の葱もてる腕に倚りてうち
挑む。
薄暮の河岸のあかしや、二本の河岸のあかしや、
その葉のゆめの金絲雀のごとくに散るころを、

またしてもくちずさむ、下品なる港街の小唄。
青き青き溝渠の光は暮れてゆく……

わかきニキタはぼんやりと薄笑しつつ、……
十月の枯草の黄なるかがやき、そがかげのあひ
びきの
浮つきし聲のかすれを思ひいで、
また外光の紫に河岸の燕の飛び翔りながら隙
見する
瞳青きフランス酒場の淫れ女が湯浴のさまを

思ひやり、
あるはまた火事ありし日の夕日のあたる草土
堤に
だらしなく擁へ出されて薫りたる淡黄の、赤の
乳綠の、青の、沃土の、
催笑劑や泣藥、痲痺劑や惚藥、そのいろいろの音
樂の罐。
さて組合の禿頭のトムソンが赤つちやけたる
鹿爪らしき古外套をかしがり、
恐ろしかりし夏の日のこと、どくだみの臭き花

のなかに
「キ……ン……タ……マ……が……い……た……い」と
白粉厚き皺づらに力なく啜り泣きつつ、
終に斃れし旅藝人のかつぽれが臨終の道化姿
ぞ目に浮ぶ。

今死斯點きし入口の撻押しあけて
石油の臭新らしく人は去る、流行の背廣の身が
るさよ。

いつしかに日は暮れて河岸のかなたはキネオ
ラマのごとく燈點き、
吊橋の見ゆるあたり黄なる月嘹喨と音も高く
出でんとすれど、
あはれなほS組合の薄白痴のらちもなき想は
つづく……

III 泣きごゑ

わが寢ねたる心のとなりに泣くものあり——
夜を一夜、乳をさがす赤子のごとく
光れる釣鐘草のなかに頰をうづめたる病兒の
ごとく、
あるものは「京終」の停車場のサンドウキッチの
呼びごゑのごと、
黄にかがやける枯草の野を幌なき馬車に乘り
て、

密通したる女のただ一人夫の家に歸るがごと
く、
げにげにあるものは大蒜の畑に狂人の笑へる
ごとく、
「三十三間堂」のお柳にもまして泣くこゑは、
ネル着けてランプを點す横顔のやはらかき涙
にまじり
理髪器の銀色ぞやるせなき囚人の頭に動く。
そのなかに肥滿りたる古寡婦の豚ぬすまれし
驚駭と、

窓外の日光を見て四十男の神官が
死のまへに啜泣せるつやもなく怖しきころ。
ああ夜を一夜、
わが寢たる心のとなりに泣くもののうれひよ。

Ⅳ 銀色の背景

わが悲哀の背景は銀色なり。
そは五月の葱畑のごとく、
夏の夜の「若竹」の銀襖のごとく青白き瓦斯に光る。

そのまへに、——
弊私的里の甚しきは
私通したる泊芙藍色の女の

聲もなき白痴の兒をば抱きながら入日を見る
がごとくに歩み、
かの苦く青くかなしき愁夜曲……
ある夜のわれは恐ろしくして美しき竹本小土
佐の
「合邦」の玉手御前の悲歎をば彈語する風情に坐
り、
暗き暗き欝悶は
鈍銀の引かれゆく幕の前に、指組める「仁木」のご
とく

隈青き眼の光烟とともにスッポンの深き恐怖
よりせりあがる。……
何時も何時もわが悲哀の背景には銀色の密境
ぞ住む。
そのなかに鳴きしきる蟲の音よ、
匂高き空氣の迅き顫動、
太棹と、鋭き拍子木、
ああああわが凡の官能は盲ひんとして靜かに
光る。

V　神經の凝視

日は暮るる、日は暮るる、力なき欝金の光……

ゆき馴れし一本の楡のもと、半壞れし長椅子に、
恐ろしき病室を扶けいでたるわがこころの
神經の疑ふかき凝視……

足もとの、そこここの小さき花は
長く長く抱擁したるあとの黄色なる興奮に似

て
光り……なげき……吐息し……
沈默したる風は
生前の日の遺言狀の秘密のごとくに刺草の間
に沈み、
美しき絶望のごとたまさかに蜥蜴過ぎゆく。
近郊の鐘は鳴る……修道院晩餐の鐘……
神經の澄みわたる凝視はつづく——

その青くして何物にも吸ひ取らるるがごとき
瞳は
身をすりよする異母妹の性の恐怖より逃れん
とし、
親しき友人の顔に陋しき探偵の笑を恐れ、
色蒼なる醜き悪縁の女を殺さんとし、
さらにわが生を力あらしめんがために砒素を
醫局の棚より盗み、
終にまた響も立てぬ靈の深緑の瞳にうち吸は
れ、

わが心の深淵に突き落されし處女の銀の咽び
をきく。
この時、病院の青白き裏口の戸に佇める看護婦
は
携へし烏籠の青き小鳥の鳴くこゑをさびしみ
ながら、
角吹ける乘合馬車の遠き遠き黄のかがやきを
なつかしむ。

日は暮るる、日は暮るる、力なき麟金の光……

四十三年二月

物理學校裏

Borum. Bromun. Calcium.
Chromium. Manganum. Kalium. Phosphor.
Barium. Iodium. Hydrogenium.
Sulphur. Chlorum. Strontium……
(寂しい聲がきこえる、そして不思可議な……)

日が暮れた、淡い銀と紫——

蒸し暑い六月の空に
暮れのこる棕櫚の花の惱ましさ。
黄色い、新しい花穂の聚團が
暗い裂けた葉の陰影から噎せる如に光る。
さうして深い吐息と腋臭とを放つ
齒痛の色の黄、沃土ホルムの黄、粉つぽい亢奮の
黄。

$C_2H_2O_2N_2+NaOH=CH_4+Na_2CO_3$……

蒼白い白熱瓦斯の情調が曇硝子を透して流れ

る。
角窓のそのひとつの内部に
光のない青いメタンの焔が燃えてるらしい。
肺病院の如な東京物理學校の淡い青灰色の壁
に
いつしかあるかなきかの月光がしたるる。

Tin……tin……tin.n.n.n……tin.n……
tire……tire……tin.n.n.n……syn……
t……t……t……t……tote……tsn.n……syn.n.n.n.n……

靜かな惱ましい晩、
何處かにお稽古の琴の音がきこえて、
崖下の小さい平家の亞鉛屋根に
コルタアが青く光り、
柔らかい草いきれの底にLampの黃色い赤みが
點る。
その上の、見よ、すこしばかりの空地には
濕つた胡瓜と茄子の鄙びた新らしい臭が
惶ただしい市街生活の哀愁に縋れる……

汽笛が鳴る……四谷を出た汽車のCadenceが近
づく……
暮れ惱む官能の棕梠
そのわかわかしい花穗の臭が暗みながら噎ぶ、
齒痛の色の黃、沃土ホルムの黃、粉つぽい亢奮の
黃。
寂しい冷たい敎師の聲がきこえる、そして不可
思議な……

そこここの明るい角窓のなかから。

Sin……,Cosin……,Tan……,Cotan……,Sec……,Cosec……

etc……

Ion. Dynamo. Roentgen. Boyle. Newton.

Lens. Siphon. Spectrum. Tesla の火花

攝氏、華氏、光、Bunsen. Potential. or, Archimedes. etc, etc……

棕梠のかげには野菜の露にこほろぎが鳴き、

無意味な琴の音の稚なびた Sentiment は

何時までも何時までもせうことなしに續いて

ゆく。

汽笛が鳴る……濠端の淡い銀と紫との空に

停車つた汽車が蒼みがかつた白い湯氣を吐い

てゐる。

靜かな三分間。

惱ましい棕梠の花の官能に、今、

蒸し暑い魔睡がもつれ、

暗い裂けた葉の緣から銀の憂鬱がしたたる。

その陰影の捕促へがたき Passion の色、

齒痛の色の黄、沃土ホルムの黄、粉つぽい亢奮の黄。

Neon. Flourum. Magnesium.
Natrium. Silicium. Oxygenium.
Nitrogenium. Cadimium or, Stibium
etc., etc.……

四十三年三月

骨なし兒と黑猫

そは恐ろしきXなり。淫らにして不倫なる母の
ごとく、
汝が神經と知覺とは痛ましきほど慄けども、力
なき骨なし兒よ。
終日、わづらはしき病室の白葡萄酒の如き空氣
に呼吸し、
靈のうつらぬ瞳は唯狂はしき硝子戸の外をう

ち凝視む。

そが背後の棚の上、やや青みたる陰影の中、
ニッケルの產科の器械鵞のごとき嘴して光り、
薄く曇れる硝子のなかにとりあつめたる藥劑
の罎、
その青く赤くおぼめける劇藥のエチケッテ……
鋭く、苦し。

ああ骨なし兒よ。この薄暮の反射に、

柔軟かにして惱ましき汝が衾は銀の潤澤に光
れど、
冷やかなる鐵の寢臺の上、据ゑられし木造の函
は、
汝が身を入れたる小さき牢獄は山葵色の曇に
うち歎く。

大人びたる顏の白き白き白粉の恐ろしさよ。
なよなよと凭せたる身體のしまりなさ。
靈の青さ、いたましさ、

生温るき風のごと骨もなき手は動く――その空
に鏞銀の鐘はかかれり。

ああ、ああ、今しがたまでぞ、この硝子戸の外には
五時ごろの日の光わかわかしき血のごとくふ
りそそぎ、
見えざる窓下のあたりより、
抑壓えあへぬ抱擁の笑ひ聲きこえしか――葱畑
すでに青し。

鏞銀の鐘よりは一條の絹薄青く下りて光る。
その端をはづかに取りたる手は、その瞳は、
ああ、すべて力なし。――さらにさらに痛ましき
はかかる青き薄暮の激しき官能の刺戟。

聽け、遂に、彼は泣く。……
あらず、そは馴染みたる黒猫なりき。ふくらなる
身を跳らせて、
銀色の衾の裾にのぼりつつ背を高めたる。
黄ばみたる青葱色の眼の光來る夜の恐怖にそ

そぐ

かくてただ聲もなし。青く光る硝子戸に眞白
なる顔ふりむけて、
哀樂の表情もなく親しげに畜類の眼と並びつ
つ何をか凝視む。
ああ、暗き暗き葱畑の地平に黄なる月いでんと
して、
鏽銀の鐘は鳴る……幽かに、……幽かに……や
るせなき靈の求めもあへぬ鄉愁。

四十三年二月

雪ふる夜のこころもち

今夜も雪が降つてゐる。……

Blue devils よ。
醉ひ狂つた俺の神經が——
Sara……sara……とよる雪の幽かな瞬を聽きわける
ほど——
ひつそりと怖氣づく、ほんの一時の氣紛につけ

込んで、
汝はやつて來る……顚ひながら例の房のつい
た尖帽をかぶつて、
搔きむしつた亞麻色の髪の、泣き出しさうな青
い面つきで、
ふらふらと浮いた腰の、三尺ほどの脚棍に乘つ
て、
ひよつくりこつくり西洋操人形のやうにやつ
てくる。

硝子の閉つた青い街を、
濡れに濡れた舗石のうへを、
ピアノが鳴る……金色の顚音の
潤むだ夜の空氣に綠を帶びて消えてゆく。
雪がふる。……
濕つた劇藥の結晶、
アンチピリンの(頓服劑の)粉末のやうに——
それがまた青白い瓦斯に映つて
弊私的里の發作が過ぎた、そのあとの沈んだ氣

分の氛圍氣に
落ちついた悲哀の斷片がしみじみと降りしき
る。

そのとき、
酒場の薄い硝子から
むちやくちやになつた神經が、馬鹿にしろとい
ふ調子で、
それでも沈まりかへつて、
恐怖と可笑の眼を瞠つたまま、

ふる雪を、
Blue devils の歩行を眺めてゐる。
ひよつくりこつくり顫へてゆく……
ピアノに合せた足どりの、ふらふらと兩手を振
つて、あかしやの禿げた並木をくぐりぬけ。
三角形の街燈の鐵の支柱によろけかかつて腰
をつき、
そそくさと、そそくさと、內隱から山葵色の罎を
取り出し、
こくこくと仰向いて、苦さうな口のあたりに持

てゆく。

雪がふる……白く……薄青く……

それが罎を收つて
ひよいと此方を見る。
涙の一杯たまつた眼に
張のない痳痺しきつた笑を洩らしながら、
克明な靈のかたわれが
ひよつくりこつくり道化た身振に消えてゆく。

ああ、靜かな夜、
何處かに幽かに杏仁水のにほひがして
疲れた官能が痺れてくる……

濡れたあかしやが銀の恐怖に光つて、
一ならび青い硝子に反射する——そのほかは
聲もせぬ通の長い舗石のうへを
痺れて了つたピアノの顫音が、
ふる雪の斷片が、

活動寫眞のまたたきのやうに
音もなく瓦斯の光に顫へてゐる。

雪がふる。

Sara……sara……sara……

薄ら青い、冷たい千萬の斷片が
落ついた悲哀の光が、
弊私的里の發作が過ぎた、そのあとの沈んだ氣
分の氛圍氣に、
しんみりとしたりズムをつくつて

しづかに降りつもる。

Sara……sara……sara……sara……

四十三年六月

解雪

わが憂愁は溶けつつあり、
黄色く赤くみどりに、
屋根の雪は溶けつつあり、
光りつつ、つぶやきつつ、滴りつつ……

日はすでにまぶしく、
菓子屋の煙突よりは烟のぼり、

病犬は跛曳きつつ舗石をゆく、
そのなかに溶けつつあるものの小歌。

やはらかにかよわく、ほそく、
そは裁縫機械のごとく幽かに、
いそがしく、
さまざまの光を放ちつつ滴る。

喪心のたのしさを聽け。
薄暗き地下室の厨女よ、

湯沸の湯氣の呼吸も
玉葱のほとりにしづごころなし。

丸の内の三號、
その高き煉瓦より、筧より、また廂より、
かくれたる物の芽に沁みたる無數の寶玉の溶解、
温かに劇藥のながれ濕る音樂……
わが憂愁は溶けつつあり、

黄色く、赤く、みどりに、
屋根の雪は溶けつつあり、
光りつつ、つぶやきつつ、滴りつつ……

四十三年六月

青い髯

青い髯

五月が來た。
硝子と乳房との接觸……桐の花とカステラ……
春と夏との二聲樂、冷めたい冬……

とりあつめた空氣の淡い感覺に、
硝子戸のしみじみとした汗ばみに、
さうして、私の剃りたての青い面の皮膚に、

黄緑のPassionを燃えたたせ、顫はす
日光の痛さ、
その眩ぶしい音樂は負傷兵の鳴らす釣鐘のや
うに、
恢復期の精神病患者がかぎりなき悲哀のIrony
に耽けるやうに、
心も身體も疲らした
その翌日の私の弱い瞼のうへに、
キラキラとチラチラと苦い顫音を光らす、
強く絶えず、やるせなく……

午前十一時半、
公園の草わかばの傷みに病犬の黄い奴が駈け
まわり、
禿げた樹木の梢がそろつて新芽を吹く、
螺施狀の臭のわなないきと、底力のはづみと、
Whiskeyの色に泡だつ呼吸づかひと……
而して、わかい男の剃りたての面の皮膚の下か
ら
青い髯が萌える……

五月が來た。
どこかしらひえびえとした微風が
閃めく噴水の尖端からしづれて、
ニホヒイリスや和蘭陀薄荷のしめりを戰がせ、
ぢつと、私が凝視むる、
小酒杯の透明な無色の火酒を顫はし、
黄綠の外光を浴びた青年の面のうへを、
なめらかに砥石のやうな青みを、
Poeの頰のやうな手ざはりを、

すいすいと剃刀のやうに觸れる、
私は無言で冷たい小酒杯をとりあげ、
しみじみと赤い唇にあてる……
五月が來た、五月が來た。
楠が萌え、ハリギリが萌え、朴が萌え、篠懸の並木
が萌える。
そうして、私の
新しいホワイトシャツの下から青い汗がにじ

む、
植物性の異臭と、熱と、くるしみと。……
芽でも吹きさうな身體のだらけさ、
(何でもいいから抱きしめたい。)
萌える、萌える、萌える、萌える、
青い髯が
ウオッカの沁み込む熱い頬の皮膚から萌え
る。……
くわつとふりそそぐ日光、

冷たい風、
春と夏との二聲樂、……綠と金……

四十三年五月

五月

新しい烏龍茶と日光、
澁味もつた紅さ、
湧きたつ吐息……

さうして見よ、
牛乳にまみれた喫茶店の猫を、
その猫が惱ましい白い毛をすりつける

女の膝の彈力。

夏が來た、
靜かな五月の晝、湯沸からのぼる湯氣が、
紅茶のしめりが、
爽かな夏帽子の麥稈に沁み込み、
うつむく横顏の薄い白粉を汗ばませ、
而してわかい男の强い體臭をいらだたす。

「苦しい刹那」のごとく、黃ばみかけて

痛いほど光る白い前掛の女よ。
「烏龍茶をもう一杯。」

四十三年五月

銀座花壇

赤い花、小さい花、石竹と釣鐘艸。
かなしくよるべなき無智……
瓦斯の點いた
勸工場のはいりくち、
明るい硝子棚、紗の日被、
夏は朝から惱ましいのに

花が咲いた……あはれな石竹と釣鐘草。

わかい葉柳の並木路、撒水した煉瓦道、
そのなかの小さな人工花壇、
(疲れた瞳の避難所)
その方二尺のかなしい區劃に、
夏がきて花が咲いた、小さい細い石竹と釣鐘艸。

絶えず絶えず電車が通る……
おしろい汗を吹く草の葉に、

裁縫器の幽かな音に、
よせかけた自轉車の銀のハンドルの反射
日は光り、
かるい埃が薄い車輪をめぐる……
赤い花、小さい花、石竹と釣鐘草。

さうして女がゆく、
すずしい白のスカアト
その手に持つた赤皮の瀟洒な洋書、
いつかしら汗ばんだこころに

異國趣味な五月が逝く……

新しい銀座の夏、
かなしくよるべなき人工の花、——石竹と釣鐘艸。

四十三年五月

六月

白い靜かな食卓布、
その上のフラスコ、
フラスコの水に
ちらつく花、釣鐘草。

光澤のある粹な小鉢の
釣鐘草、

汗ばんだ釣鐘草、
紫の、かゆい、やさしい釣鐘草、

さうして噎びあがる
苦い珈琲よ、
熱い夏のこころに
私は匙を廻す。

高窓の日被
その白い斜面の光から

六月が來た。
その下の都會の鳥瞰景。

幽かな響がきこゆる、
やはらかい乳房の男の胸を抑へつけるやう
な……
苦い珈琲よ、
かきまわしながら
靜かに私のこころは泣く……

四十三年六月

新聞紙

一九一〇、六月、はじめの月曜
冷めたい朝の七時、
つつましい馭者臺のうへに、
ただひとり爽かに折りかへす新聞紙の
綠の薄い反射……
微かな鐵分をふくんだ空氣に

まだ青味を帶びた棕梠の花が
かよわい淡黃色に光り、
ちらほらと夏帽子の目につく
なつかしいだらだら坂の下の
日分署の前の通……せはしい電車の鐸……
撒水夫の喞筒を動かすさびしさ、
濠端の火の消えた瓦斯燈に
白マントルが顔へ、
その硝子の一點に日光の金が光つてる。

わかい馭者は
窓のないカキ色の四人馬車を
梧桐のかげにひき入れたまま、
しづかに讀み耽る……

こころもち疲れた馬の呼吸……
短く刈つた栗毛の光澤から沁み出る
臭の奇異な汗ばみ、その上にさしかくる
新聞紙の新しい觸感、

わか葉の薄い綠の反射。
新しい客を待つ間、
やすらかな五分時が過ぎゆく……

四十三年六月

畜生

やはらかにかなしきは畜生の
こころなれ。

赤き日はアカシヤのわか葉にけぶり、
蕀肉の黄なる花ちらちらと噎ぶとき
怖々と投げいだし、眠りたる靈の
人間の五官にもわきがたきいと深きかなし

み……

そのゆめはこころもち汗ばみて
傷つきし銀毛の耳に
痛き花粉は沁み、
やるせなき肉體の憂鬱に
柔かにかろく魘さるれど、
汝が母を犯したる
靈の不倫をば知るよしもなし。

五時過ぎて暮ちかき夏の日は

血に染みし呼鈴の聲のごとくふりそそぎ、
嫋やかなる風は蜜蜂の褐色に、
蜜蜂のつぶやきは
かろく花粉を落す。

汝が微かなる寢息は
腐れたる玉葱のにほひにも沁み、
快く荒みゆく性の秘密にや笑ふらん。
匍ひよりし毛蟲の奇異なる綠にも
汝は覺めず……

ひとみぎり園丁の鍬の刃はかなたに光り、
堀りかへさるる土の香の濕潤吹き來る。

あはれ、かかる日に病みて伏す
やはらかにかなしき畜生の
捉へがたき微溫の、やるせなきそのこころ……

四十三年六月

隣人

隣人は露西亞の地主のごとく、
素朴な黑の上衣に赤木綿のバンドを占め、
長靴を穿き、
禿げた頭のきさくから他の畑を見回る。
隣人はよく蠶豆のなかに立ち、
雨に濡れた黃花蒜肉を眺める。

＊"Ogamadashi, Mauske"自慢らしい手つき で
喞えたパイプの雁首をぽんとはたく。
隣人は見え坊だ、そりばつてん、
どうかすると客嗇漢だ、
世界苦の氣欝から、
馬鈴薯を食べすぎた食傷から。
隣人は女房を恐れる、長崎うまれの
肥滿女の息の臭い、馬鹿力のある、

それでよく小娘のやうにかぢりつく、
牛肉と晝寢の好きな飲酒家。

隣人は日に一度黑い蒸汽をながめる、
その悲しい面に泊芙藍のやうな
黄いろい日が光り、涙がながれる。
さうして悄然と御燈明をあげにゆく。

隣人の宣教師、混血兒のベンさん
氣まぐれな禿頭、

青い眼鏡をかけては街を歩行き、
日曜の日には御説教。

"Changhang-deki no Mariya Sanma
Ne wa yasuka-batten,
utsukushikaken,
Minasan yō ogan de wokinasare,"

＊お精がでます、茂助。

四十三年六月

雨の氣まぐれ

雨はふる。……雨はふる……
やるせない春機發動期の憂鬱病……神經の哀
しい衰弱……
黄色い胃病患者の腐つた氣分にふりそそぐ雨。
私通した小娘の青い惡阻の秘密と恐怖とにふ
りそそぐ雨。
泥醉漢のおくびと、殺人の溫るい計畫とにふり

そそぐ雨。

しとしと、しとしと、
絶間なく雨はふる、ふりそそぐ、にじむ、曳く、消ゆ
る、滴る。
わが暗い靈の霖雨季の長いひと月、
日がな終日、晝も夜も、一昨日も、昨日も、今日も
亂次ない雨はふる、ふりそそぐ、にじむ、曳く、消ゆ
る、滴る。
酸つぱい麥酒のやうな氣の拔けた雨。

いそぎんちやくの液のむづかゆい雨。
黴くさいインキいろの青い雨。
雨……雨……雨……

雨はふる……雨はふる……
酸敗えかかつた橡の葉の纖維に蛞蝓の銀線を
曳き、
臭い栗の花の白金を腐らし、
鐵粉のやうに光る芝生の土に沁み込み、
青い古池の面に怪しい笑を辷らせ、
せうことなしに雨はふる、ふりそそぐ、何時まで

も何時までも小止みなく……

陰氣な黴くさい雨、長い雨……日ぐらしの雨……
ともすると疲れきつた悲愁の裏から
微かな日光の金を投げかくる雨。
雨のふる廢園の木立の暗い綠色の空間。
その洞のやうな葉かげの恐怖にふりそそぐ
雨。……

折から、ひよいと、花やかに

地より身輕なひるがへり、躍り出したる怪のも
のが
突拍子もないひと躍り、……

Kappore! Kappore!
Amacha de Kappore!
Shiwocha de Kappore!
Yoito na! Yoi! Yoi!

緋のだんだらの尖帽に戯姿の道化師が

恐ろしきほど眞白く白粉つけた呆けがほ。

Oki……no……o……o,
Kura……ai……no……ni……i, i,
Shira……a……Ho……gu……miyuru,
Are…wa…Ki……no…Ku…u,u…ni,
Ha! Yoito kono korewa no sa!
A! a! a! a! a!
Mika……n……Bu……u,u……ne……!

目も動かさず、白々と惡く澄ましたくはせ者、
燥ぎくるめく廉ものの
蓄音機から絞りだす囃——黄色な甲高の
三味の笑に挑まれて、
戯けつくした身のひねり、
突拍子もないひと躍り……

Ichi kake, Ni kake, San kake te,
Shi kake te, Go kake te, Hasyo kake te,
Kawai Okata wo……

ふいと消えたる變化もの、
白粉の濃い、手の白い、素足の白い、
唇の赤い沈默……

雨はふる……雨はふる……
陰氣な微くさい雨……長い雨……日ぐらしの
雨……
氣まぐれな不攝生のあとの痛ましい寂寥、
幻影の消え失せた雰圍氣の暗い綠に、

むづ痒ゆいやうな、氣の抜けた、さみしい、弱い、せ
うことなしの
雨はふる……雨はふる……本能と神經の黄昏
時。

じ、じ、と、じ、じ、と、
絶間なく雨はふる、ふりそそぐ、葉から葉へ、じ、と
と滴る。
深緑の闇い夜——ふる雨の黒いかがやき、
廢れたる椽の葉に古池に靈の底の秘密へ、

日がな終日、晝間から、今日の朝から、昨日から、遠
い日の日の夕から、
ふりつづく長い長い憂鬱の單音律、
その青い雨……微くさい雨……投げやりの雨……
辛氣くさい靜かな雨、かなしいやはらかな……
生温るい計畫の雨。
雨……雨……雨……

四十三年六月

葱の畑

寥しい霊が鳴いて居る。
そこここの濕つた黑い土のなかで
晝の蟲が
幽かな、銀の調子で鳴いてゐる。
疲れた日光が
五時半ごろの重い空氣と、

湯屋の曇硝子とに、
黄色く濡れて反射し、
新しい臭のなかに弱つてゆく。
寂しい霊が鳴いてゐる。

毛なみのいい樺と白の犬が
交んだまま葱のなかにかくれてる。
眩しさうに首だけ覗いて
淀んだ瞳に

何物をか恐れてゐる。——
息がしづかに莖の尖頭を顫はす。

何處かで百舌が鳴きしきる。
疲れた、それでも放縱な
三十過ぎた病身の女らしい、
湯屋の硝子戸を出ると直ぐ
石鹸のにほひする身體をかがめて
嬰兒に小便をさしてる。

寥しい靈が鳴いてゐる。……

母の眼と嬰兒の眼が
一樣に白い犬の耳に注がれる。
可愛いいちんぽこから小便が出る。
その尿と、濡れた西洋手拭と、束髮と、
無意味な眼つきと、白つぽい葱の青みに、
しみじみと黃色な光がうつる。

しだいに反射がうすれて

よろこびもすすり泣けり。
惡緣のふかき恐怖もすすり泣けり。

八月の傾斜面に、
美くしき金の光はすすり泣けり。

四十三年八月

秋

日曜の朝、「秋」は銀かな貝の細卷の
絹薄き黑の蝙蝠傘さしてゆく、
紺の背廣に夏帽子、
黑の蝙蝠傘さしてゆく、

瀟洒にわかき姿かな。「秋」はカフスも新らしく
カラも眞白につつましくひとりさみしく歩み

來ぬ。

波うちぎはを東京の若紳士めく靴のさき。

午前十時の日の光海のおもてに廣重の
藍を燻して、蟲のごと白金のごと閃めけり。
かろく冷たき微風も鹹をふくみて薄青し、
「秋」は流行の細卷の
黑の蝙蝠傘さしてゆく。

日曜の朝、「秋」は匂ひも新らしく

新聞紙折り、さはやかに衣嚢に入れて歩みゆく、
寄せてくづるる波がしら、濡れてつぶやく銀砂
の、
靴の爪さき、足のさき、バッチバッチと蟲も鳴く。

「秋」は流行の細卷の
黑の蝙蝠傘さしてゆく。

四十四年十月

槍持

おかる勘平

おかるは泣いてゐる。
長い薄明のなかでびろうど葵の顫へてゐるや
うに、
やはらかなふらんねるの手ざはりのやうに、
きんぽうげ色の草生から晝の光が消えかかる
やうに、
ふわふわと飛んでゆくたんぽぽの穂のやうに。

泣いても泣いても涙は盡きぬ、
勘平さんが死んだ、勘平さんが死んだ、
わかい奇麗な勘平さんが腹切つた……

おかるはうらわかい男のにほひを忍んで泣く、
麹室に玉葱の咽せるやうな強い刺戟だつたと
思ふ。
やはらかな肌ざはりが五月ごろの外光のやう
だつた、

紅茶のやうに熱つた男の息、
抱擁められた時、晝間の鹽田が青く光り、
白い芹の花の神經が、鋭くなつて眞蒼に凋れた、
別れた日には男の白い手に烟硝のしめりが沁
み込んでゐた、
駕にのる前まで私はしみじみと新しい野菜を
切つてゐた……

その勘平は死んだ。

おかるは温室のなかの孤児のやうに、
いろんな官能の記臆にそそのかされて、
楽しい自身の愉快に耽つてゐる。

（人形芝居の硝子越しに、あかい柑子の實が秋の
夕日にかがやき、黄色く霞んだ市街の底から
河蒸氣の笛がきこゆる。）
おかるは泣いてゐる。
美くしい身振の、身も世もないといふやうな、
迫つた三味に連れられて、

チョボの佐和利に乗つて、
泣いて泣いて溺れ死にでもするやうに
おかるは泣いてゐる。

（色と匂と音楽と。
勘平なんかどうでもいい。）

四十二年十月

雪の日

淡青い雪は
冷めたい硝子戸のそとに。……

紫の御召をひきかけた
濱勇は
東の棧敷に。

薄い襟あしの白粉も見よきほどに
こころもち斜に坐つて。
うつむき加減にした横顔の
淡青い雪の反射。

静かに曳かれてゆく幕そとの、
立三味線、
仁木の青い目ばりの凄さ。

暮れかかる東京のそらには

ほんのりと瓦斯が點き
淡青い雪がふる。

半玉は冷めたい指をそろへて、
引込の面あかりをながめ、
なにかしらさみしさうに。

淡青い雪は
冷めたい硝子戸のそとに。

幽かな音、幽かな色、幽かなささやき……

四十三年七月

種蒔き

バッチバッチと鳴く蟲の
晝のさびしさ、つつましさ、……
葱の畑のそこここに銀の懷中時計を閉める音。
けふも彼岸のあかるさに、
誰に見しよとか、權兵衛は
青い手拭、頬かぶり、

桝を小脇に、ひえびえと畝のしめりを踏んでゆく。
畝の光に蒔く種は
かなしみの種、性の種、黑稗の種。
バッチバッチと鳴く蟲の
晝のさびしさ、しをらしさ、……
強い日射のそこここに若いこころの咽ぶ音。
ほんに一日齷齪と

歎き足らひで、權兵衛が
青いバッチに繩の帶、
及び腰してひとすぢに土の臭を嗅いでゆく
午後の光に蒔く種は
かなしみの種、性の種、黑稗の種。

バッチバッチと鳴く蟲の
晝のさびしさ、なつかしさ。……
黑い鴉の嘴に種のつぶれてなげく音。

若い身そらの內密事、
ひとり苦に病む權兵衛が、
歩みののろさ、手の痛さ、
腰の痛みにしみじみと明き其夜を泣いてゆく。
銀の祕密に蒔く種は
かなしみの種、性の種、黑稗の種

バッチバッチと鳴く蟲の
晝のさびしさやるせなさ。……
常に啄まれて生れ得ぬ種の、嬰兒の、なげく音。

妻も子もない醜男の
何時も吝嗇い權兵衛が
貧の盜みか、一擁え
葱を伏せつつ、怖々と畝の凸みを凝視めゆく、
伏せたこころに蒔く種は
かなしみの種、性の種、黒稗の種。

バッチバッチと鳴く蟲の
晝のさびしさおそろしさ。……

黒い眼玉が背後からぢつと睨んで歩む音。
欲のつかれか、冷汗か、
鐘が唸れば權兵衛の
野暮な胸さへしみじみと、
金の入日の凌雲閣傷みながらに蒔いてゆく。
けふの恐怖に蒔く種は
かなしみの種、性の種、黒稗の種。

バッチバッチと鳴く蟲の

畫のさびしさ、情なさ。……
黒い鴉につぶされて種の凡の滅ゆる音。

四十三年十月

忠彌

雪はちらちらふりしきる。

城の御濠の深みどり、
雪を吸ひ込む舌うちの
しんしんと沁むたそがれに、
鴨の氣弱がかきみだす
水の表面のささにごり

知るや知らずや、それとなく
小石投げつけ、——
ひつそりと底のふかさをききすます
わかき忠彌か、わがおもひ。

君が秘密の日くれどき、
ひとり心につきつめて
そつとさぐりを投げつくる
深き恐怖(おそれ)か、わが涙——
千萬無量の瞬間(たまゆら)に

雪はちらちらふりしきる。

四十五年十一月

歌うたひ

悲しいけれどもわしや男、
いやでもお酒をさがしませう、
赤いセエリイもないならば
飲んだふりして就寝みませう。
みすぎ世すぎの歌うたひ。

四十三年十一月

槍持

槍は鏽びても名は鏽びぬ、
殿につきそふ槍持の槍の穂尖の悲しさよ。

槍は槍持、供揃へ、
さつと振れ、振れ、白鳥毛。
けふも馬上の寛濶に、

殿は伊達者の美い男、
三國一の備後樣、
しんとところりと見とれる殿御。
槍は槍持、銀なんぽ。
供の奴さへこのやうに、あれわいさの、これわい
さの、取りはづす、
やあれ、やれ、危なしやの、槍のさき。
槍は鏽びても名は鏽びぬ、
殿のお微行、近習まで

身なりくづした華美づくし、
槍は九尺の銀なんぽ、
けふも酒、酒、明日もまた、
通ふしだらの浮氣づら、
わたる日本橋ちらちらと雪はふるふる、日は暮
れる、
やあれ、やれ冷たしやの、槍のさき。
槍は槍持、供ぞろへ、
さつと振れ、振れ、白鳥毛。

雪はふれども、ちらほらと
河岸の問屋の灯が見ゆる、
さてもなつかし飛ぶ鷗、
壁のしたには廣重の紺のぼかしの裾模様、
殿の御容量に、ほれぼれと
わたる日本橋、槍のさき、
槍は擔げど、空のそら、澁面つくれど供奴、
ぴんとはねたる附髭に、雪はふるふる、日は暮れる。

やあれ、やれ、やるせなの、槍のさき。

槍は槍持、供ぞろへ、
さつと振れ、振れ、白鳥毛。

槍は鏽びても名は鏽びぬ。
殿につきそふ槍持の槍の穂さきの悲しさよ。
いつも馬上の寛濶に、
殿は伊達者のよい男、
さぞや世間の取沙汰に

浮かれ騒ぐも女なら。
そこらあたりの道すぢの紺の暖簾も氣がかりな。
槍は九尺の銀なんぼ、
槍を持つ身のしみじみと、涙流すもつとめ故、
さりとは、さりとは、供奴、
雪はふるふる、日は暮れる。
やあれ、やれ、しよんがいなの、槍のさき。

四十五年三月

CHONKINA.

"Chonkina! chonkina!
Chon-chon kina-kina!
Chon ga nanoso de,
Cho-chon ga yoi!……"

「赤い夕日、
活動寫眞見たいなキラキラが、あのやうに、あれ、

御覽な。

お向ふの三層樓の高い部屋の障子に、何時まで
も何時までも照りつける辛氣くさ、
寢まきや、長繻袢の、
如何したんだらうねえ、まあ、
雨肌なんか脱いだりさ、
欄干に腰かけたり、跨いだり、
自墮落な、あれさ、落こつたらどうするの、
氣まぐれも大概になさいなね、
あれ、あの手も眞赤な狐拳！」

"Chon-aiko ! chon-aiko !……"

「華魁、ちよいと、御覽なさいな、
久し振で裏門が開いたと思つたら、
大變ですわねえ、あれ、あんなに水が、
隨分しどい音だこと、
堤をもう越したんですとさ。
龍泉寺、山谷、今戸のわたし、
そりやもう大變な騒よ、

おやおや、まあ、素つ裸で、
揚屋町の通を傳馬擔いで奔るなんて
銀ちやん、威勢がいいことねえ。」

"Chon-aiko! Chon-aiko!……"

「華魁、何をそんなに見てお出でなの、
くよくよとさ、
黄色いふたつの高張に
赤い日が、あのやうに射しかけて、

ぴちやぴちやと濁水が凄いわねえ、
あら、ちよいと、そんな處で
おちんこなんか捲くるもんぢやありませんつ
たら、
小兒は罪が無ことねえ、ほほほほ。まあ。」

"Chonkina! chonkia!
Chon-chon, kina-kina,
Chon ga nanoso de,
Cho-chon ga yoi,

Aiko de yoi,……
Chon-aiko ! chon-aiko……”

吉原の中店の
お職「小主次」として、愁ひ顔の寥しい、
どうしたことやら、
白粉もまだつけぬ青いいろの、
なつかしい眼つきの女、
疲れたやうに、藍色の薄いネルを着ながして
新造と二人、

—ひとりは立膝—
華魁は灯のつかぬ五時ごろの
薄暗い角店の二重に腰かけて、
何とやら澄まぬ顔、
左の人さし指の薄い繻帶に
金いろの背後の附立が、
支那彫の唐獅子の、
冷たい光を投げかくる。
そのさだまらぬ陰影のかげの
そのなかの幽かなためいき……

"Chonkina ! Chonkina !……"

格子戸越しに、赤い日が
高い屋並の不思議な廂にてりかへし、
洪水の音がきこえる。
欄干では何時までも何時までも
氣まぐれな狐拳。

"Chon-aiko ! chon-aiko,

Chon-chon aiko-aiko,
Chon ga nanoso de
Cho-chon ga yoi……"

"Chonkina ! chonkina !……"

四十三年七月

鬼百合

夏の日の東京に、
歌澤のこころいき……
しみじみと身にしみて
きく年增、
すらりとした立姿の
中形の薄青さ、

それしやの粹なこころに。
日がそそぐ……銀色のきりぎりす
浮氣男を殺した
晝寢の夢の凄さ、
たてひきの憎さ、
かなしさ、つらさ、くるしさ、
日がそそぐ……わかいお七の半鐘か、死ぬるき
りぎりすか。
銀の光の細かな強いすすりなき。

大河をまへに、
脣に啣えた帶留の金——
手をうしろにまはして、
暑さうなものごしの、
なにかしら寂しさうに、
きりきりと締め直す黑い繻子の一筋。

けだるげな三味線が
あれ、またもあのやうに、……

青みもつ目のふちの疲れから
なにを見るとなし熟視むる
黑い瞳の深さ、
酸いも甘いも嚙みわけた
中年の激しい衝動……その底のさみしさ、つら
さ、かなしさ。

黑い繻子の手ざはりが
きゆつ、きゆつと……

暑い、苦しい、くるしい日、
澁い鬼百合の赤さ、
鮮かな臭の強さ、
濕つた褐色の花粉の
細かにちる……背後の床の間の大輪。
觸る帶の繻子、やはらかな粉、
こころもきゆつきゆつと……
夏の日のさる河岸に

歌澤のこころいき。
ええまあ、
奈何すりや宜いつてんだらうねえ。

四十三年七月

道化もの

ふうらりふらりと出て來るは
ルナアパークの道化もの、
服は白茶のだぶだぶと戯け澄ました身のまわり、
あつち向いちやふうらふら、
こつち向いちやふうらふら、
緋房のついた尖がり帽子がしをらしや。

鉛粉眞白けで丸ふたつ
頰紅さいたるおどけづら、
圓い眼ばりもくるくるど今日も呆けた宙がへり。
かなしやメエリイゴラウンド、
さみしや手品の皿まわし、
春の入日の沈丁花がどこやらに。
ひとが笑へばにやにやと、

猫のなきまね、烏啼き、
たまにやべそかき赤い舌、嘘か、色眼か、涙顔。
鳴いそな鳴いそ春の烏、
鳴いそな鳴いそ春の烏、
紙の櫻もちらちらとちりかかる。

薄むらさきの圓弧燈、
瓦斯と雪洞、鶴のむれ、
石油エンヂンことことと水は山から逆おとし、
臺灣館の支那の兒

足の小さな支那の兒、
しょんぼり立つたうしろから馬鹿囃子。

ぬうらりしやらりと日が暮れて
またも夜となる、道化もの、
あかい三角帽をちよいと投げてひよいと受け
たら禿頭。
あつち向いちやくうるくる、
こつち向いちやくうるくる、

御愛嬌(ごあいきやう)か、またしてもとんぼがへり。

四十四年三月

あそびめ

たはれをのかずのまにまに
じだらくにみをもちくづし、
おしろいのあをきひたひに
ねそべりてひるもさけのみ、
さめざめとときになみだし、
ゆふかけてさやぎいづとも、
かなしみはいよよおろかに、ながねがひいよよ

つめたし。
あはれよのしろきねどこの
まくらべのべコニャのはな。

四十五年五月

南京さん

李さん、鄭さん、支那服さん、
あなたの眼鏡はなぜ光る、
涙がにじんで日に光る。
鳥屋の硝子も日に光る。
目白、カナリヤ、四十雀、
鶉に文鳥に黒鶫、
鳥もいろいろあるなかに

おかめ鸚哥はおどけもの
焦れて頓狂に啼きさけぶ。
さてもいとしや、しをらしや、
けふも入日があかあかと
わかい南京さんは涙顔。

四十四年十月

蝮捕り

旅のすがたの蝮捕り。
紺の脚絆に紺の足袋、
紺の小手あて、盲縞。
羽織、腹掛しやんとして草鞋つつかけ忍びあし。

わかい男の忍びあし、
まがひバナマに日が射せば、

苦みばしつた横顔のことにつやつや蒼白く、
ほそく割いたる青竹に蝮挾みてなつかしく、
渚のほとり、草土手の曼珠沙華さくしたみちを、
九月午後、忍びあし。

静かにゆるき潮鳴は、
夏と秋との伴奏、
五十三次、廣重の海の匂もまだ熱く、
眉にかがやく忍びあし、……
蝮の腹もいと青く。

けふのこの日の蝮捕り、——
渡りあるきの生業の昨日の疲れ、
明日の首尾、
案じわづらふ足もとに飛んで跳ねたはきりぎ
りす。
疲れた三味が鳴るわいな。
意氣な年增の手ずさみか、
取り殘された避暑客の後の一人の爪彈か、

離縁られた人か、死ぬ人か、
思ひなしかは知らねども、
昨日あがつた心中の男女の忍び泣き、……
あれ三味が鳴る、晝日なか、
知らぬ都のふしまはし。

わかい吐息の忍びあし、
そつと留めて、聞惚れて、なにをおもふや、うつと
りと、
蝮の腹の青縞の博多帶めくつややかさ、

きゆつきゆと白き指つけて、拭きつ、さすりつ、薄
笑みつ、
九月、午後、日の光——
こころの縞もいと青く。

蝮よ、蝮よ、やはらかな、熱い冷たい手觸りの、
そなたも三味にきき惚れて身をうねらすや、や
るせなく、……
平首、竹に挾まれて、されどゆかしく、あどけなく、
無心に瞠る眼のいろは空と海との水あさぎ。

蝮よ小さい尾のさきの、匂の肌をつまぐれば、
毒ある汗はいきいきと、神經のごと細やかに、
朱の斑なまめく褐と黄の波斯模様の美くしさ、
それか、怪しき淫れ女の
閨の麝香の息づかひ。

九月午後、日の光——
あれ三味が鳴る、きりぎりす、
飛んで死んだがましかいな。

四十四年九月

雪と花火

夜ふる雪

蛇目の傘にふる雪は
むらさきうすくふりしきる。
空を仰げば松の葉に
忍びがへしにふりしきる。
酒に醉うたる足もとの

薄い光にふりしきる。
拍子木をうつはね幕の
遠いこころにふりしきる。
思ひなしかは知らねども
見えぬあなたもふりしきる。
河岸の夜ふけにふる雪は
蛇目の傘にふりしきる。

水の面にその陰影に
むらさき薄くふりしきる。
酒に酔うたる足もとの
弱い涙にふりしきる。
聲もせぬ夜のくらやみを
ひとり通ればふりしきる。

思ひなしかはしらねども
こころ細かにふりしきる。

蛇目の傘にふる雪は
むらさき薄くふりしきる。

四十四年一月

柳の左和利

ほの青い雪のふる夜に、
電車みちを、
酔つて、酔つて、酔つぱらつてさ、ひよろひよろと、
ふらふらと、凭れかかれば、硝子戸に。
Yoi!……Yoi!……Yoitona!……

ほの青い雪はふり、

店のなかではしんみりと柳の佐和利、
酔つて、酔つて、酔つぱらつてさ、ふらふらと、
ひよろひよろと首をふれば太棹が……
Yōi!……Yōi!……Yōitona!……

ほの青い雪の夜の
蓄音機とは知つたれど、きけばこの身が泣かる
る。
酔つて酔つて酔つぱらつさ、ひよろひよろと、
ふらふらと投げてかかれば、その咽喉が……

Yōi!……Yōi!……Yōitona!……

ほの青い雪のふる
人ひとり通らぬこの雪に、まあ何とした、
酔つて酔つて酔つぱらつてさ、ふらふらと、
ひよろひよろと、しやくりあぐれば誰やらが、
Yōi!……Yōi!……Yōitona!……

四十四年一月

春の鳥

鳴きそな鳴きそ春の鳥、
昇菊の紺と銀との肩ぎぬに。
鳴きそな鳴きそ春の鳥、
歌澤の夏のあはれとなりぬべき
大川の金と青とのたそがれに。
鳴きそな鳴きそ春の鳥。

四十三年四月

かるい背廣を

かるい背廣を身につけて、
今宵またゆく都川、
戀か、ねたみか、吊橋の
瓦斯の薄黄が氣にかかる。

四十三年七月

薄あかり

銀の時計のつめたさは
薄らあかりのVIIの字に、
君がこころのつめたさは
河岸の月夜の薄あかり。

薄いなさけにひかされて、けふもほのかに來は
來たが、

心あがりのした男、何のわたしに縁があろ。

空の光のさみしさは
薄らあかりのねこやなぎ、
歩むこころのさみしさは
雪と瓦斯との薄あかり。

思ひ切らうか、切るまいか、そつと歸ろか、何とせう。
いつそあの日のくちつけを後のゆかりに別れ

よか。

水のにほひのゆかしさは
薄らあかりの鴨の羽、
三味のねじめのゆかしさは
遠い杵屋の薄あかり。

かるい背廣を身につけてじつと凝視むる薄あかり。
薄い涙につまされて、けふもほのかに來は來たが。

銀の時計のつめたさは
薄らあかりの VII の字に、
君がこころのつめたさは
青い月夜の薄あかり。

戀か、りんきか、知らねども、ほんに未練な薄あかり。
思ひ切らうか、たづねよか、ええ何とせう、しよんがいな。

四十三年三月

金と青との

金と青との愁夜曲、
春と夏との二聲樂、
わかい東京に江戸の唄、
陰影と光のわがこころ。

四十三年五月

雨あがり

やはらかい銀の毬花の、ねこやなぎのにほふやうな、
その濕つた水路に單艇はゆき、
書割のやうな杵屋の
裏の木橋に、
紺の蛇目傘をつぼめた、
つつましい素足のさきの爪革のつや、

薄青
そ
ほ
黄
ち
な

そ
薄
微
新
ほ
な

わたしの胸に、
薄いセルは
微かな涙に、
ほんとに睡ちやつたの。

そなたの寝息は
桐の花のやうに、
やるせないこころをそそのかし、
捉へかぬる微かな光。
ほんとに睡ちやつたの。

そなたのけふ入れた緋鮒か、
それとも陶器の金魚かしら、
なにかしら寂しい力の
薄い硝子に觸るやうな……
ほんとに睡ちやつたの。

そなたの知つてる男は
みんな薄情ものだ。
さうしてそなたが眠むつてから

何時でもこんな風にささやく、
ほんとに睡ちやつたの、

四十三年七月

心中

あはれなる心中のうはさより
わが靈は泣き濡れてかへりゆく、
花つけしアカシヤの並木のかげを、
嫋やかなる七月のおとづれのごとく。
やすらかに平準らされしこころは
あるものの抑壓のかげにありて、

つねにかかる微顫をこそのぞみたれ。
いみじく幽かなるそのLiedよ。

附きやすき花粉のしめりのごとく、
そはまた眶の汗のごとくに顔へやすし。
護謨輪のゆけばためらひ、
吊橋の淡黄なる瓦斯のもとを泣きゆく。

新道を拔けては
欅の芽のむせびをあはれみ、

御神燈のかげをば
それしやの浴衣ともすれちがふ。

とある河岸のおでんやには
寄席のビラのかなしく、
薄汗の光る紙に
水菓子の色透くがいとほし。

あはれなる心中のうはさより
わが靈は泣き濡れてかへりゆく、

微風の吹くままに過ぎゆく
嫋やかなる七月のおとづれのごとく。

四十三年七月

花火

花火があがる、
銀と緑の孔雀玉……バッとしだれてちりかかる。
紺青の夜の薄あかり、
ほんにゆかしい歌麿の舟のけしきにちりかかる。

花火が消ゆる。

薄紫の孔雀玉……紅くとろけてちりかかる。

Toron……tonton……Toron……tonton……

色とにほひがちりかかる。

兩國橋の水と空とにちりかかる。

花火があがる。

薄い光と汐風に、

義理と情の孔雀玉……涙しとしとちりかかる。

涙しとしと爪彈の歌のこころにちりかかる。

團扇片手のうしろつきつんと澄ませど、あのやうに

舟のへさきにちりかかる。

花火があがる、

銀と綠の孔雀玉……パッとかなしくちりかかる。

紺青の夜に、大河に、

夏の帽子にちりかかる。

アイスクリームひえびえとふくむ手つきにち

りかかる。
わかいこころの孔雀玉、
ええなんとせう、消えかかる。

四十四年六月

放埒

放埒のかなしみは
ひらき盡くせしかはたれの花の
いろの、にほひのちらんとし、ちりも了らぬあは
ひとか。

かかる日の薄明に、
しどけなき恐怖より螢ちらつき、

女の皮膚にシャンペンの香からめば、
そは支那の留學生もなげくべき
尺八の古き調子のこころなり。

うら若き藝妓には二上りのやるせなく、
中年の心には三の絲下げて彈くこそ、
下げて彈くこそわりなけれ。

かくて、日のありなし雲の雨となり、
そそぐ夜にこそ。

おしろい花のさくほとり、しんねこの幽かなる
音を泣くべけれ。

放埒のかなしみは
ひらき盡くせしかはたれの花の
いろの、にほひの、ちらんとし、ちりも丁らぬあは
ひとか。

四十三年八月

紫陽花

かはたれに紫陽花の見ゆるこそさみしけれ。
うらわかき盲人のいろ飽まで白く、
そのほとりに頬を寄するは――
かろくかさねし手のひらの彈く爪さき、それと
なく、
隆達ぶしの唱歌など思ひ出づるはいとかなし。

誰かつくりし戀のみち、いかなる人も踏み迷
ふ……
よしやわれにも情あれ。寮の日くれの、あ、もの憂
や、
何とせうぞの。蜩の金の線條顫はす聲も、
緣さへあらば、またの夕日にチレチレ
またの夕日に時雨るる。

おはぐろどぶのかなしみは
岐阜提燈のかげうつる茶屋のうしろのながし

湯の
石鹸のにほひ、黴の花、青いとんぼの眼の光。

よひやみの、よひやみの、
いづこにか、赤い花火があがるよの、
音はすれども、そのゆめは
見えぬこころにくづるる……

ほのかにも紫陽花のはな咲けば、
新にかけし撒水の

香のうつりゆくしたたり、
さて、消えやらぬ間の片戀。

四十三年八月

カナリヤ

たつた一言きかしてくれ。
カナリヤよ、
たんぽぽいろのカナリヤよ、
ちろちろと飛びまはる、ほんに浮氣なカナリヤよ。
おしやべりのカナリヤよ。
たつた一言きかしてくれ、

丁度、彈きすてた歌澤の、
三の絃の消ゆるやうに、
「わたしはあなたを思つてる。」と。

彼岸花

憎い男の心臓を
針で突かうとした女、
それは何時かのたはむれ。

晝寢のあとに、
ハッとして、
けふも驚くわが疲れ。

憎い男の心臓を
針で突かうとした女、——
もしや棄てたら、キッとまた。

どうせ、濕地の
彼岸花、
蛇がからめば
身は細そる。

赤い、濕地の
彼岸花、
午後の三時の鐘が鳴る。

四十四年十一月

もしやさうでは

もしやさうではあるまいかと
思うても見たが、
なんの、そなたがさうであろ、
このやうなやくざにと、——
胸のそこから血の出るやうな
知らぬ僞いうて見た。

雪のふる日に
赤い酒をも棄てて見た。
知らぬふりして、
ちんからと
鳴らしたその手でさかづきを。

四十四年十一月

片足

花が黄色で、芽がしよぼしよぼで、
見るも汚ない梅の木に
小鳥とまつて鳴くことに、——
あれ、あの雪の麥畑の、つもつた雪のその中に、
白い女の片足が指のさきだけ見えて居る。
はつと思つて佇めば、

小鳥逃げつつ鳴くことに、——
何時(いつ)か憎いと思うたくせに、
卑怯未練な、安心さしやれ、
あれは誰かの情婦(いろ)でもなけりや、
女乞食の兒でもない。
一軒となりの李右衛門(りうえもん)どんの
唖の娘が投げすてた白い人形の片足ぢや。

四十四年十二月

あらせいとう

人知れず袖に涙のかかるとき、
かかるとき、
ついぞ見馴れぬよその子が
あらせいとうのたねを取る。
丁度誰かの爲(す)るやうに
ひとり泣いてはたねを取る。
あかあかと空に夕日の消ゆるとき、

植物園に消ゆるとき。

四十三年十月

あかい夕日に

あかい夕日につまされて、
酔うて珈琲店を出は出たが、
どうせわたしはなまけもの
明日の墓場をなんで知ろ。

四十三年十月

銀座の雨

銀座の雨

雨……雨……雨……
雨は銀座に新らしく
しみじみとふる、さくさくと、
かたい林檎の香のごとく、
舗石の上、雪の上。
黒の山高帽、獵虎の毛皮、

わかい紳士は濡れてゆく。
蝙蝠傘の小さい老婦も濡れてゆく。
……黒の喪服と羽帽子。
好いた娘の蛇目傘。
しみじみとふる、さくさくと、
雨は林檎の香のごとく。

はだか柳に銀緑の
冬の瓦斯點くしほらしさ、
棚の硝子にふかぶかと白い毛物の春支度。

肺病の子が肩掛の
弱いためいき。
波斯の絨氈、
洋書の金字は時雨の靈、
Henri De Régnier が曇り玉、
息ふきかけてひえびえと
雨は接吻のしのびあし、
さても緑の、寶石の、時計、磁石のわびごころ、
わかいロテイのものおもひ。
絶えず顫へていそしめる

お菊夫人の縫針の、人形ミシンのさざめごと。
雪の青さに片肌ぬぎの
たぼもつやめく髪の型、つんとすねたり、かもじ
屋に
紺は匂ひて新らしく。
白いピエロの涙顔。
熊とおもちやの長靴は
兒供ごころにあこがるる
サンタクロスの贈り物。
外はしとしと淡雪に

沁みて悲しむ雨の絲。

雨は林檎の香のごとく
しみじみとふる、さくさくと、
扉を透かしてふる雨は
Verlaine の涙雨、
赤いコップに線を引く、
ひとり顔へてふりかくる
辛い胡椒に線を引く、
されば聲出す針の尖、蓄音器屋にチカチカと

廻るかなしさ、ふる雨に
酒屋の左和利、三勝もそつと立ちぎく忍び泣き。
それもそうかえ淡雪の
光るさみしさ、うす青さ、
白いショウルを巻きつけて
鳥も鳥屋に涙する。
椅子も椅子屋にしよんぼりと
白く寂しく涙する。
猫もしよんぼり涙する。
人こそ知らぬ、アカシヤの

性の木の芽も涙する。
雨……雨……雨……
雨は林檎の香のごとく
冬の銀座に、わがむねに、
しみじみとふる、さくさくと。

四十四年十二月

雪

雪でも降りさうな空あひだね、今夜も
ほら、もう降つて來たやうだ、その薄い色硝子を
　透かして御覽。
なつかしい圓弧燈に眞白なあの羽蟲のたかる
　やうに
細かなセンジュアルな悲しみが、向ふの空にも、
橋にも柳にも、

水面にも、
書割のやうな遠見の、黄色い市街の燈にも、
多分冷たくちらついてゐる筈だ。それとも積つ
　たかしら。
幽かな囁き……幽かなミシンの針の
薄い紫の生絹を縫ふて刻むやうな、
色澤のある寂しいリズムの閃めきが、
そなたの耳にはきこえないのか……湯から上
　つて、
もう一度透かして御覽、乳房が硝子に傑へるま

で。

曇つたのぼせさうな湯殿に、
白い湯氣のなかに、
螢が飛ぶ……燐のにほひの螢が、
ほうつほうつと……あれ銀杏がへしの
つんと張つた鬚のうらから
肩から、タオルからすべつて消える。
ほうつほうつと。

さうではない、さうではない、
すらりとした兩つのほそい腕から、
手の指の綺麗な爪さきの線まで、
何かしら石鹸が光つて見えるのだ、さうして
魔氣のふかい女の素はだかの感覺から
忘れた夏の記憶が漏電する。
ほうつほうつと螢が光る。
不思議な晩だ、まだ鋏を取つたまま
何時までも足の爪を剪つてゐるのか、お前は
泪芙藍湯の温かな匂から、

香料のやはらかなげきから、
おしろいから、
夏の日のあめも美しく
女は踊る、なつかしいドガの Dancer

雪がふる……降つてはつもる……
しめやかな悲しみのリズムの
しんみりと夜ふけの心にふりしきる……
ほうつほうつと、螢が飛ぶ……
あれごらんな、綺麗だこと、

青、黄、緑、……さうしてうすいむらさき、
雪がふる……降つてはつもる……
そつとしておきき、何處かでしめやかな三味線
が、
あれ、もう消えて了つた、鳴いたのは水鳥かしら、
硝子を透してごらん、小さな赤い燈が
ゆつくらと滑つてゆく、河上の方に
紀州の蜜柑でも積んで來たのかしら……
何だか船から喚んでるやうな……
ひつそりとしたではないか、

もう一度、その薄い硝子からのぞいて御覽、
恐らく紺いろになつた空の下から、
遠見の屋根が書割のやうに
白く青く光つて
疲れた千鳥が靜な水面に鳴いてる筈だ。
サラリとその硝子を開けて御覽……
スツカリ雪はやんで
星が出た、まあ何て綺麗だらうねえ、
あれ御覽、眞白だ、眞白だ。
まるでクリスマスの精靈のやうに、

ほんとに眞白だねい。

四十四年十一月

冬の夜の物語

女はやはらかにうちうなづき、
男の物語のかたはしをだに聽き逃さじとする
に似たり。
外面にはふる雪のなにごともなく、
水仙のバッチリとして匂へるに薄荷酒青く搖
げり。
男は世にもまめやかに、心やさしくて、

かなしき女の身の上になにくれとなき温情を
寄するに似たり。
すべて、みな、ひとときのいつはりとは知れど、
互みになつかしくよりそひて、
ふる雪の幽かなるけはひにも涙ぐむ。
女はやはらかにうちうなづき、
湯沸のおもひを傾けて熱き熱き珈琲を掻きた
つれば、
男はまた手をのべてそを受けんとす。

あたたかき暖爐はしばし息をひそめ、
ふる雪のつかれはほのかにも雨をさそひぬ。
遠き遠き漏電と夜の月光。

四十四年一月

キャベツ畑の雨

冷びえと雨が、さ霧にふりつづく、
キャベツのうへに、葉のうへに、
雨はふる、冬のはじめの乳緑の
キャベツの列に葉の列に。

あまつさへ、柵の網目の鐵條に
白い鳥奴が鳴いてゐる。

雨はふる、くぐりぬけてはいきいきと、
色と匂を嗅ぎまはる。

ささやかな水のながれは北へゆく。
キャベツのそばを、葉のしたを、
雨はふる路もひとすぢ、川下の
街も新らし、石の橋。

キャベツ畑のあちこちに
かがみ、はたらき、ひとかかえ

野菜かついではしるひと、
雨はふる。けふもあをあを夏帽子。

小父さんが來る、眞蒼に、脚も顫へて、
お早うがんす。山楂子の芽もこわごわと
泥にまみるる。立ちばなし。
雨はふる。しつかと握る水藥の黄色の罐の鮮や
かさ。

「阿魔つ子がね昨夜さ、

いいらぶつ吃驚げた眞似仕出かし申してのお
前さま。」
雨はふる。光つては消ゆる、剃刀で
咽喉を突いた女の頬。

「だけんどどうかかうか生きるだらうつて、
醫者どんも云やんしたから。」まづは安心と軍
鷄屋の小父さん
胸をさすればキャベツまで
ほつと息する葉の光。

鳥が鳴いてる……冬もはじめて眞實に
雨のキャベツによみがへる。
濡れにぞ濡れて、眞實に
色も匂もよみがへる。

新らしい、しかし、冷たい朝の雨、
キャベツ畑の葉の光。
雨はふる。生きて滴る乳綠の
キャベツの涙、葉のにほひ。

四十四年一月

蕨

春と夏とのさかひめに
生絹めかしてふる雨は
それは「四月」のしのびあし、
過ぎて消えゆく日のうれひ。

蕨の青さ、つつましさ、
花か、卷葉か、知らねども、

その芽の黄さ、新らしさ……
庭の井戸から水揚げて、
しみじみと撰る手のさばき、
見るもさみしや、ふる雨に。

ひとりは庭のかたすみに、
印半纏着てかがみ、
ひとりはほそき角柱、
しんぞ寥しう手をあてて、
朝のつかれの身をもたす

古い宿場の青楼。

しとしとしとふる雨に
柱時計の羅馬字も
蓋も冷たし、しらじらと
針のIXを差すその面。

ひとりはさらに水あげて、
さつと蕨の芽にそそぎ、
ひとりはじつと眼をふせて、

揚枝つかへり弊私的里の
朝のつかれの身だしなみ。

空と海との燻し銀、
けふの曇りにふる雨は
それは涙のしのびあし、
青い臺場の草の芽に
沁みて「四月」も消えゆくや、
帆かけた船も、白鷺も
ましてさみしやふる雨に。

もののあはれにふる雨は、
さもこそあれや、早蕨(わらび)の
その芽に莖に渦卷きて
はやも「五月」は沁(し)むものを
なにかさみしきそのおもひ。

春と夏とのさかひめに
生絹(きぬ)めかしてふる雨は
それは「四月」のしのびあし、

過ぎて消えゆく日のうれひ。

四十四年四月

涙

蒼ざめはてたわがこころ、
こころの陰のひとすぢの
神經の絃そのうへに、
薄明のその絃に、

薄明のその絃に、
ちらと光りて薄青く、

踊るものあり、豆のごと……
雨は涙とふりしきる。

見れば小さな緑玉、
ひとのすがたのびいどろの、
頬にも胸にもふりしきる、
涙……かなしいその眼つき。

聲もえたてぬ奇しさは
夜半に「秘密」の抜けいでて、

所作になげくや、ただひとり、
バントマイムの涙雨。

月の出しほの片あかり、
薄き足もつびいどろの、
肩に光れど、さめざめと、
歎き恐れて、夜も寝ねず。

金のピアノの鳴るままに、
濡れにぞ濡るれすべもなく、

神經の上、絃のうへ、
雨は涙とふりしきる。

四十四年十月

新生

新らしい眞黄色な光が、
濕つた灰色の空——雲——腐れかかつた
暗い土藏の二階の窓に、
出窓の白いフリジアに、髓の髓まで
くわつと照る、照りかへす。眞黄な光。
眞黄色だ眞黄色だ、電線から

忍びがへしから、庭木から、倉の鉢まきから、
雨滴が、憂鬱が、眞黄に光る。
黒猫がゆく、
屋根の廂の日光のイルミネエション。

ぽたぽたと塗りつける雨、
神經に塗りつける雨、
靈魂の底の底まで沁みこむ雨
雨あがりの日光の
鬱悶の火花。

眞黄だ……眞黄な音樂が
狂犬のやうに空をゆく、と同時に
俺は思はず飛びあがつた、驚異と歡喜に
野蠻人のやうに聲をあげて
匍ひまはつた……眞黄色な灰色の室を。
女には兒がある。俺には俺の
苦しい矜がある、藝術がある、而して欲があり熱
愛がある。

古い土藏の密室には
塗りつぶした裸像がある、妄想と罪惡と
すべてすべて眞黄色だ。——
心臓をつかんで投げ出したい。

雨が霽れた。
新らしい再生の火花が、
重い灰色から變つた。
女は無事に歸つた。
ぽたぽたと雨だれが俺の涙が、

眞黄色に眞黄色に、
髓の髓から渦まく、狂犬のやうに
燃えかがやく

午後五時半。
夜に入る前一時間。
何處(つか)で投げつけるやうな
あかんぼの聲がする。

四十四年十月

四十四年の春から秋にかけて自分の間借りして居た

旅館の一室は古い土藏の二階てあるが、元は待合の
密室で壁一面に春畫を描いてあつたそうな、それを
塗りつぶしてはあつたが少しつつくづれかかつてる
た。もう土藏全體が古びて雨の日や地震の時の危ふ
はこの上もなかつた

黄色い春

黄色、黄色、意氣で、高尚で、しとやかな
棕梠の花いろ、卵いろ、
たんぽぽのいろ、
または兒猫の眼の黄いろ……
みんな寂しい手ざはりの、岸の柳の芽の黄いろ、
夕日黄いろく、粉が黄いろくふる中に、
小鳥が一羽鳴いゐる。

人が三人泣いてゐる。
けふもけふとて紅つけてとんぼがへりをする
男、
三味線彈きのちび男、
俄盲目のものもらひ。

街の四辻、古い煉瓦に日があたり、
窓の日覆に日があたり、
粉屋の前の腰掛に疲れ心の日があたる、
ちいちいほろりと鳥が鳴く。

空に黄色い雲が浮く、
黄いろ、黄いろ、いつかゆめ見た風も吹く。

道化男がいふことに
「もしもし淑女、とんぼがへりを致しませう、
美くしいオフエリヤ様、
サロメ様、
フランチエスカのお姫様。」
白い眼をしたちび男、
「一寸、先生、心意氣でもうたひやせう」

俄盲目も後から
「旦那様や奥様、あはれな片輪で御座います、
どうぞ一文。」
春はうれしと鳥も鳴く。

夫人、
美くしい、かはいい、しとやかな
よその夫人、
御覧なさい、あれ、あの柳にも、サンシユユにも
黄色い木の芽の粉が煙り、

ふんわりと沁む地のにほひ。
ちいちいほろりと鳥も鳴く、
空に黄色い雲も浮く。

夫人。

美くしい、かはいい、しとやかな
よその夫人、
それではね、そつとここらでわかれませう、
いくら行つてもねえ。

黄色、黄色、意氣で高尚で、しとやかな、
茴香のいろ、卵いろ、
「思ひ出」のいろ、
好きな兒猫の眼の黄いろ、
浮雲のいろ、
ほんにゆかしい三味線の、
ゆめの、夕日の、音の黄色。

四十五年三月

汽車はゆくゆく

汽車はゆくゆく、二人を載せて、
空のはてまでひとすぢに。
今日は四月の日曜の、あひびき日和、日向雨、
塵にまみれた櫻さへ、電線にさへ、路次にさへ、
微風が吹く日があたる。
街の瓦を瞰下ろせばたんぽぽが咲く、鳩が飛ぶ、
煙があがる、くわんしやんと暗い工場の槌が鳴

る

なかにをかしな小屋がけの
によつきりとした野呂間顔。
青い布かけ、すつぽりと、よその屋根からにゆつ
と出て
兩手つん出す彌次郎兵衛姿、
あれわいさの、どつこいしよの、堀拔工事の木遣
の車、
手をふる、手をふる、首をふる——
わしとそなたは何處までも。

汽車はゆくゆく、二人を乘せて
都はづれをひとすぢに。
鳥が鳴くのか、一寸と出た龜井戸驛の驛長も
芝居がかりに戸口からなにか恍然もの案じ、
柵に載つけたシネラリヤ、
紫の花、鉢の花、色は日向に陰影を增す。
惡戯者の兒守さへ、けふは下から眞面目顏、
ふたつ並べたその鼻の孔に、眇眼に、まだ齒も生
えぬ

ただ揉みくちやの泣面のべそかき小僧が口の
中
蒸氣噴きつけ、驀進、バテー會社の映畫の中の
汽車はゆくゆく、——空飛ぶ鳥の
わしとそなたは何處までも。
汽車はゆくゆく、二人を乘せて、
廣い野原をひとすぢに。
ひとりそはそは、くるりくるくる、水車
廻る畑のどぶどろに、

葱のあたまがとんぼがへりて泳ぎゆく、
ちびの菜種の眞黄いろ
堀に曳きずる肥舟の重い小腹にすられゆく。
さても笑止や、垣根のそとで
障子張るひと、椿の花が上に眞赤に輝けば
張られた障子もくわつと照る、
烏勘左衛門、烏啼かせてくくわつと吹く
よかよか飴屋のちやるめらも
みんなよしよし、粉嚢やつこらさと擔いで、
禿げた粉屋も飛んでゆく。

蒸氣噴き噴き、斜に
汽車はゆくゆく……椿が光る。
わしとそなたは何處までも。

汽車はゆくゆく二人を乘せて
空のはてまでひとすぢに。
硝子窓から微風入れて、
煙草吹かして、夕日を入れて、
知らぬ顔して、さしむかひ、——
下ぢや、ちよいと出す足のさき

ついと外せばきゆつと蹈む、——
雲のためいき、白帆のといき
河が見えます、市川が。
汽車はゆくゆく、——空飛ぶ鳥の
わしとそなたは何處までも。

四十五年四月

梨の畑

あまり花の白さに
ちよつと接吻をして見たらば、
梨の木の下に人がゐて、
こちら見ては笑うた。
梨の木の毛蟲を
竹ぎれてつつき落し、
つつき落し、

のんびり持つた*喇叭で
受けて廻つては笑うた、
しよざいなやの、
梨の木の畑の
毛蟲採のその子。

*紙製の喇叭見たやうなもの

四十五年四月

河岸の雨

雨がふる、綠いろに、銀いろに、さうして薔薇いろに、薄黄に、
絹糸のやうな雨がふる、
うつくしい晩ではないか、濡れに濡れた薄あかりの中に、
雨がふる、鐵橋に、町の燈火に、水面に、河岸の柳に。

雨がふる、啜泣きのやうに澄みきつた四月の雨
が
二人のこころにふりしきる。
お泣きでない、泣いたつておつつかない、
白い日傘でもおさし、綺麗に雨がふる、寂しい雨
が。

雨がふる、憎くらしい憎くらしい、冷たい雨が、
水面に空にふりそそぐ、まるで汝の神經のやう
に。

薄情なら薄情におし、薄い空氣草履の爪先に、
雨がふる、いつそ殺してしまひたいほど憎くら
しい汝の髪の毛に。

雨がふる、誰も知らぬ二人の美くしい秘密に
隙間もなく悲しい雨がふりしきる。
一寸おきき、何處かで千鳥が鳴く、歇私的里の靈、
濡れに濡れた薄あかりの新内。

雨がふる、しみじみとふる雨にうれ連れて、雨が、

二人のこころが啜泣く、三味線のやうに、
死にたいつていふの、ほんとにさうならひとり
でお死に、
およしな、そんな氣まぐれな、嘘つぱちは。私は
いやだ。

雨がふる、緑いろに、銀いろに、さうして薔薇色に、
薄黄に、
冷たい理性の小雨がふりしきる。
お泣きでない、泣いたつておつつかない、

どうせ薄情な私たちだ、絹糸のやうな雨がふる。

四十五年五月

そなた待つ間

チョンキナ、チョンキナ、
チョンキナ踊を、
けふの踊をひとをどり。

そなた待つとて、いそいそと、岡を上(のぼ)れば日が廻(まは)る、
雲も草木もうつとりと、

それかあらぬか、わがこころ圓(まる)い眞赤(まつか)な日が廻(まは)る。

チョンキナ、チョンキナ、
チョンキナ踊を、
岡の草木がひとをどり。

そなた待つとて、ピンのさき池に落せばくるくると、
生きて駈けゆく水すまし、

それかあらぬか、投げ棄てたマニラ煙草の粉の
光。

チョンキナ、チョンキナ、
チョンキナ踊を、
池の面がひとをどり。

そなた待つとて、夏帽子投げて坐れば野が光る
ほけた鶯すみればな、
それかあらぬかたんぽぽか、羽蟻飛ぶ飛ぶ、野が

光る。

チョンキナ、キョンキナ、
チョンキナ踊を、
楡の羽蟻がひとをどり。

そなた待つとて、そはそはと風も吹く吹く、氣も
廻る。
空に眞赤な日も廻る。
それかあらぬか、足音か、胸もそはそは氣も廻る。

チョンキナ、チョンキナ、
チョンキナ踊を、
白い日傘がひとをどり。

*チョンキナの繰返しはやはりチョンキナの囃子にて歌ふ。

四十五年五月

薄荷酒

「思ひ出」の頁(ページ)に
さかづきひとつうつして、
ちらちらと、こまごまと、
薄荷酒を注(つ)げば、
緑はゆれて、かげのかげ、仄かなわが詩に啜り泣く、
そなたのこころ、薄荷ざけ。

思ふ子の額に
さかづきそつと透かして、
ほれぼれと、ちらちらと、
薄荷酒をのめば、
緑は沁みて、ゆめのゆめ、黒いその眸に啜り泣く、
わたしのこころ、薄荷ざけ。

四十五年四月

白い月

わがかなしきソフィーに。

白い月が出た、ソフィー。
出て御覧、ソフィー。
勿忘草のやうな
あれあの青い空に、ソフィー。
まあ、何んて冷つこい

風だらうねえ、
出て御覽、ソフィー。
綺麗だよ、ソフィー。

いま、やつと雨がはれた——
綠いろの廣い野原に、
露がきらきらたまつて、
日が薄すりと光つてゆく、ソフィー。

さうして電話線の上にね、ソフィー。

びしよ濡れになつた白い小鳥が
まるで三味線のこまのやうに留つて、
つくねんと眺めてゐる、ソフィー。

どうしてあんなに泣いたの、ソフィー。
細かな雨までが、まだ、
新内のやうにきこえる、ソフィー。
——あの涼しい楡の新芽を御覽。

空いろのあをいそらに、

白い月が出た、ソフィー。
生きのこつた心中の
ちやうど、片われでもあるやうに。

四十五年四月

芥子の葉

芥子は芥子ゆゑ香もさびし。
ひとが泣かうと、泣くまいと
なんのその葉が知るものぞ。

ひとはひとゆゑ身のほそる、
芥子がちらふとちるまいと、
なんのこの身が知るものぞ。

わたしはわたし、
芥子は芥子、
なんのゆかりもないものを。

四十五年五月

緑の種子

綠の種子

種子はこれ感覺の粹、
綠は金の陰影にして、幽かに泣くはわが心。

種子を哀しめ、よきひとよ、
冷たく、小さき芥子のたね、その一粒に心せよ、
歔欷けかし、日の光。

種子はこれ靈魂の粹、
生ける寶石、「時」の秒、金と綠の夜の秘密、
淫慾の芽の潛伏所、
阿片の精。

種子を哀しめ、よきひとよ、
綠は色の粹にして、
智慧と不思議と生滅の見えざる悲劇、
萬華鏡。

消え去り難き幽靈の
芥子の綠に泣くごとく、
裏切したる歡會の醒めて哀しきわが心。

種子を哀しめ、よきひとよ、
獻欲けかし、日の光。

四十五年八月

棗の樹

映畫の中に一本の棗の樹あり。
以太利の街なれば日の光黄色なりけり。
棗には實ありき、その實いと赤かるべきも、
ただ黄にかがやきて影を落せり。
急がしきシネマトグラフの中なれば、誰とわか
ねど突拍子もなく現はれて氣狂のごと

自轉車乘の若紳士走り廻れり、
何時までも何時までも銀の輪の走り廻れり。
うしろに寶石商の飾窓あり、舗石あり、樹の反射
あり。
黒く優しき貴夫人も過ぎゆきにけり。
棗はかがやく。その男走り廻れば
愚かや乘れるその車輪慄へつつ縮まりてゆく。
悲しくわかき男かな、ワイシャツに鼻眼鏡して、

突き當り、跳ねころべども起き直り、走り廻れり。
尻振りざまのをかしさよ、そのベタル縮まりて
玩弄品のごとく
今は早や踏むにも堪へね、ひたぶるに走り廻れ
り。

棗はかがやく。サンドウキッチ賣の爺は驚く。
惡戯小僧は栗鼠のごと木にかけのぼる。
銀の輪は走り廻れり――――ありとある、頓狂に戯
けたれども、

ただにわが憂愁の外にのみ急がしく瞬きにけ
り。

映畫の中に一本の棗の樹あり、
以太利の街なればその實いと黄色なりけり、
棗は光りき、されども影の影なればある甲斐も
なく
見る人の心に耀やきて、また倏忽に消え失せに
けり。

大正元年九月

人食ふひと

こはそもいづくの空なるや、
はた何時なりや、誰なるや、
人食ふ人ら背も矮く
ひそと聲せず、身じろがず。
蹲みて嗅ぐはなにごとか、
はた、なになれば眼も狹く

地の一點を凝視むらむ。
銀鐘のごと日は光る。

青き波紋の刺青に
あくまで黑き頰は青く、
裸の腕に一枚の
皆朱の布をひきかつぐ。

惡しき心の眞晝時
印度當麻の香の中に

笑まず狂はず、しんしんと
ひもじきごとし、泣くごとし。

血の悦楽にたましひの
ふかきうめきを忍ぶにか、
かつ現身を悲哀の
糧と食むにか、さげすむか。
淫慾の肌うつくしく
時に緑蛇ぞ走りゆく、

息蒸すばかり恐ろしき
酷暑の光、葉の濕り。

惡しき神々しろしめす
印度當麻の眞晝時、
すべて事なし、聲もなく、
はたや、そよとの風もなし。

大正二年四月

ペンギン

見知らぬ海と空とに
鳴いてゐる、鳴いてゐる、ペンギン、
なにを鳴くのか、ペンギン、
光と陰影の申子。

冷たい氷のうへから
歌ふてくるペンギン、

なにを慕ふのか、ペンギン、
寂しい空のこころに。

おそれも悔もない氣ぶりで、
あるいてくる、ペンギン、
なにが樂しいのか、ペンギン、
大勢あつまつて、のんきに。

紺と白との燕尾服で、
ものおもふペンギン、

なにが悲しいのか、小意氣な
わかい紳士のペンギン。

さらさら悲しい樣子も、
うれしさうにもない、ペンギン、
なにを慕ふのか、ペンギン、
幽かな空の光に。

四十五年五月

萬年青

ほれ〳〵と空に小鳥をとりにがし、
君涙して悲めどそれもせんなや。
ひと鉢の萬年青すら、いまはその兒に、
手をのべてこそ匍ひ寄りし君がその兒に、
人妻よ、二人してふかく秘めたる赤き實も
遂に知られて、あまつさへ、もぎりとらるゝ。

四十五年四月

悲みの奥

白く悲しく、數あまた
釣鐘の花咲きにけり。
綠こまかき神經の
悲しみの徑、園の奥、
金の光にわけ入れば
アスパロガスの葉のかげに
涙はしじにふりそそぎ、

小鳥來鳴かず、君見えず、
空も盲ひし眞晝時、
白く悲しく、數あまた
釣鐘の花咲きにけり。

四十五年五月

夕ごころ

春が逝く。……廢果てたメトロポウルホテルに、
やはらかな日の光る五時半、
萎れた千鳥草と、石鹸の泡のやうな
白い小さな花をつけた雜草のなかを、
やつと五歳のタアシャーが押されてゆく、乳母
車に載つて、
『銀だ、黄色だ、紅だ、緑だ、ようい……』

春が逝く。……暖かな外光のなかを、
輕い小兒の夏帽が光つてゆく、河の見える方へ、
さうして、支那人の老婦が後から默つて、
のんびりと、その車を押してゆくと、遠くで
意味のない叫びがきこえる、なつかしい五月の
ものの音が、
『銀だ、黄色だ、紅だ、緑だ、ようい……』
春が逝く。……幽かに汗ばんで來た棕梠の木と、

低く燻ぶつた樫の木の間から、
鐵柵を透いて道路が見え、白い蒸汽の檣が見え
る。
大河に恍惚とゆく帆船、短艇、煙、水面、
それらが揃つて日に蔭ると、何といふことなし
に、
『銀だ、黄色だ、紅だ、緑だ、ようい……』
春が逝く。……夏が來てさへ、一人の旅客も
もう訪ねて來る氣色もない寂しさ。

みんな閉めきつた窓硝子の
どころどころに孔があいて、屋根にはいつのま
にか
草が生へた……車から抱いて下ろすと、
坊やのリンネルの薔薇いろがかがやく。
『銀だ、黄色だ、紅だ、緑だ、ようい……』
春が逝く。……外廊の古びた圓い石柱に、
その蔭に坐つてゐる、支那の老婦が
黑い繻子の服の寂しさ……タアシヤーは地面

の

雑草の花をつまんでは揉る、さも無心に。
さうして春が暮れてゆく、月島の方から、何とい
ふことなしに

『銀だ、黄色だ、紅だ、緑だ、よういい……』

四十五年五月

石竹

障子閉めても、石竹の
花は出窓にいと赤し、
障子閉めつつ、自墮落に
二人並んで寝そべれど、
花はしみじみ、まだ赤し。
愚かなる花、小さき石竹。

四十五年五月

屋根の風見

子を奪ろ、子奪ろ、
鴻の巣の窓に
硝子が光る。
露西亞のサモワル、紅茶の息に
かつかと光る。
江戸橋、荒布橋。
青い燈が點く……向うの屋根に

株の風見がくるくるまはる。
晴か、曇りか、霙か、雪か、
雲はあかるし、夕日は寒し、
七歳お店の長松さへも
黒い前掛ちよいとしめて、
空を見上げちや眞面目顔、
眞面目顔。

四十四年十一月

初冬のわかれ

冷えてあかるき園の中、
ただに噴水ぞゆらぐなる。
夏の記憶のなほ白き
楕圓の、菱の花畑
なべてすがれて日も入りぬ。
けふの小徑にわかるれば

紅さるびあの花老けし、
あとに陋しく笑ふなり、
色情狂の前髪の
花かんざしを見るごとく。

枯れくさの香に、夜のかげに
弱き兒猫も匍ひめぐる。
すべて死したる同胞の
耳のあたりに目をよせて
鳴くもさみしや、針芝に。

冷えてあかるき園の中
空に噴水ぞゆらぐなる。
白雪のごと、玻璃のごと、
君が消えたる襟卷の
鳥の羽よりなほ白く。

四十四年十一月

黒ダリヤ

烏羽玉の黒きダリヤを胸にあて
加特力の尼はなにをかゆめむらむ。
角帽子雪かとばかりわなけど、
聲さへ立てず、緑玉、息をひそめし瞳こそ
精靈の日本の秋の啜泣吸ひ取る如し、泣く如し。
片戀の清きうれひに泣く人よ。
煩惱の塵うち拂ひ、しづ〳〵と入日のかたに歩

みつ〳〵、
冷やかに尼のごとくも涙せよ。
紅びろうどのいと黑き
つや〳〵と胸のあたりに光るとき。

四十四年十月

春を待つ間に

種子を蒔け種子を、
葡萄の種子を。
畑を耕け、畑を、
燕麥の畑を。
生めよ、殖えよ、地に滿てよ。
哀しきものは踊れよ。
新らしき子らの世繼の

饗宴の春を待つ間に。

四十四年十一月

目次

東京夜曲

公園の薄暮……九
鶯の歌……一三
夜の官能……一六
片戀……二一
露臺……二二

S組合の白痴

雜草園……二七
瞰望……三五
心とその周圍
I 窓の外二章……四三
II S組合の白痴……四九
III 泣きごゑ……五六
IV 銀色の背景……五九
V 神經の凝視……六二

物理學校裏……六七
骨なし兒と里猫……七五
雪ふる夜のこころもち……八一
解雪……八九

青い髯

青い髯……九五
五月……一〇二
銀座花壇……一〇五
六月……一〇九

新聞紙……一一二
畜生……一一六
隣人……一二〇
雨の氣まぐれ……一二六
葱の畑……一三六
八月のあひびき……一四一
秋……一四三

槍持

おかる勘平……一四九

雪の日……一五四
種蒔き……一五八
忠彌……一六五
歌うたひ……一六八
槍持……一六九
CHONKINA……一七五
鬼百合……一八四
道化もの……一九〇
あそびめ……一九五
南京さん……一九七

蝮捕り……一九九

雪と花火

夜ふる雪……二〇七
柳の左和利……二一一
春の鳥……二一四
かるい背廣を……二一五
薄あかり……二一六
金と青との……二二〇
雨あがり……二二一

水盤……二二三
心中……二二七
花火……二三一
放埒……二三五
紫陽花……二三八
カナリヤ……二四二
彼岸花……二四四
もしやさうでは……二四七
片足……二四九
あらせいとう……二五一

あかい夕日に……二五三

銀座の雨

銀座の雨……二五七
雪……二六四
冬の夜の物語……二七二
キャベツ畑の雨……二七五
蕨……二八〇
涙……二八六
新生……二九〇

黄色い春……二九六
汽車はゆくゆく……三〇二
梨の畑……三〇九
河岸の雨……三一一
そなた待つ間……三一六
薄荷酒……三二一
白い月……三二三
芥子の葉……三二七

緑の種子

緑の種子……三三一
棗の樹……三三四
人食ふひと……三三八
ペンギン……三四二
萬年青……三四五
悲しみの奥……三四六
夕とどろき……三四八
石竹……三五三

屋根の風見……三五四
初冬のわかれ……三五六
黒ダリヤ……三五九
春を待つ間に……三六一

繪畫

裝幀『雪と花火』……著者
挿畫『初夏の遊樂』……木下杢太郎氏
函畫『雪と花火』……著者

雪と花火餘言

東京景物詩改題に就て

東京景物詩は大正二年七月の版である。今回その第參版を上梓するに當り、書肆の乞ふがまゝに、新に當時の詩一章十二篇を增補して、「雪と花火」と改題改幀したのである。

茲に收められた七章八十餘篇の詩は、明治四十二年の二月（邪宗門出版當時）より大正二年の四月（朱欒廢刊迄）に至る、概ね四ヶ年間の制作であつて、恰度私の青春の花期に當つてゐる。その間に私は『邪宗門』『思ひ出』『桐の花』等の詩歌集を出し、また雜誌『ス

バル』に外部より聲援し、又木下杢太郎、長田秀雄兩君と都會趣味と異國情趣を基調とした雜誌『屋上庭園』を二冊發刊し、其後單獨でも雜誌『朱欒』を一年有半續刊した。而して私の周圍の華やかさはまた格別であつた。石井柏亭、山本鼎、高村光太郎、木下杢太郎、長田秀雄、吉井勇等の諸君と、初めて"PAN"の盛宴を兩國河畔に開いて以來、Younger generation の火の手はわかい感傷的な私達を愈狂氣にした。私達は日となく夜となく置酒し、感激し、相鼓舞しながら、又競つて詩作し、論議した。"PAN"の盛時を稍過ぎて私の『思ひ出』が出た。『思ひ出』は全く私の出世作であつた。之が爲めに私はあらゆる世の賞讃と羨望とを受けた。光榮限りなき『思

ひ出會』が開催され、主催者上田敏博士から涙を流して崇拜的讃辭を献げられた時に、哀な私は全く顚倒して、感謝の言葉すらもよう見つけ得ずにたゞ泣いた。かうして私は一躍して藝苑の寵兒となつた。それから一年經たずの內に私は苦しい戀に墮ち、咒はれて、一時はこの世のどん底に迄戀人と墜落して行つた。幸に罪人たる汚名も着ず、事なく許されたけれども、その事實は因習的な世上の譏笑と指彈とを受くるに充分であつた。驕奢な詩人の生活から急轉直下して、哀れな敗德者として、私は同じ藝苑の仲間からも無理解な排擠を受けた。身にあまる以前の光榮が却て禍して人の痴嫉を受けたのである。私は忍べるだけは忍んだ、然し私自身も自然と周圍から

離れて行つた。

而して一旦別れ別れになつた私の最愛の女性が、その後曩の牢舍のくるしみから肺病といふ恐ろしい不治の病に罹つて、自暴自棄に身も靈も破りはてたのを見つけ出した時、私は飛んで行つて彼を救ひ出した。而して友に別れ、都門を離れ、地位も名聞も雜誌『朱欒』をも投げすてゝ、一つには彼女の病ひを療してやりたいため、一つには新らしい生活の道程に上るべく、彼女と私の一家とを擧げて、はるばると海をわたり、相州は三崎の濱邊に一時の住居を移したのである。

恰度このわたましの夜、あれほど全盛を極めた饗宴、"PAN"も愈寂しい最後の杯を飲み干したさうである。私も全くひとりになつた。その時の寂しさ。私は涙を流して『東京景物詩』の卷末に左の數言を連ねてゐる。

『東京、東京、その名の何すれば、しかく哀しく美くしきや。われら今高華なる都會の喧騷より逃れて漸く田園の風光に就く、やさしき粗野と原始的單純はわが前にあり、新生來らむとす。顧みて今復東京のために更に哀別の涙をそゝぐ。』

※

それから愈私の長い流離の旅がはじまつたのである。

更に作品に就き詳述して置く事も、私の藝術愛好者若くは後世の白秋研究家に取り全く無意義な事では無いやうに思はれる。

大正二年七月、牛込神樂坂時代、『邪宗門』の印刷が完成した。その原稿編輯後、出版前の作が二三ある。これが『東京夜曲』中に收められた『公園の薄暮』『鶯の歌』『夜の官能』等である。之等の詩は邪宗門の最近作と同傾向のものであつて、却てその第一章『魔睡』中に入る可きものである。

其後本郷動坂へ移つてより、私の詩風は一轉して、かの『S組合の白痴』中の『雜草園』『瞰望』の如きものとなつた。種々雜多の感覺を交錯させて、惱ましい綜合の中から、ひと色のある氣分を出し度い

と思つたのである。これ等は『屋上庭園』の第一號に小詩『露臺』と共に發表された。この傾向はその時代から牛込新小川町時代迄續いた。乃ち『心の周圍』七篇その他が之を證する。

なほ之と相似て、稍單純性を帶びて來たものに、『葱畑』『父なし兒と黑猫』等がある。

なほ又、この當時、右の二傾向と全然違つた詩が一篇生れてゐる。それが『おかる勘平』である。無論別種のものではあるけれども、同じく官能的であるといふ事に於て似て居り、而も官能萬歲を極度まで亢騰さした處に、忘るべからざる記錄を作つてゐる。而してこの『おかる勘平』が同年の暮、日比谷の松本樓で開かれた“PAN”

大會席上に於て、私自身に依て朗讀せられ、その翌年同詩所載の『屋上庭園』第二號が風俗壞亂としてその筋より發賣頒布を禁ぜられたといふ事實が、之をして愈意義あらしめ、私達をして益亢奮せしめたものである。それが爲めに本集蒐錄に際しては、この詩の眼目ともいふべき大膽な、極めて性慾的な一行が削られてある。この一行を除いては全く佛作つて靈入れずの感がある。私は今も之を深く遺憾とする。

今後に來る牛込新小川町時代（自明治四十三年二月至同年八月）は愈"PAN"の盛時に當り、我他皆狂騰して饗宴し制作した。ストルム、ウント、ドランクの時代である。"PAN"の友人達は殆ど毎日毎夜の

やうに、私の宅に集つた。さうして酒に涵つた。而して熱狂する、と私の『空に眞赤な』の唄が慣例のやうに一同から合唱された。私達はまたよく袂を連ねて東京市街を漫歩した。華々しくて放恣なさういふ日が續いたあと、折々急に私は獨になりたくなつて、小石川の植物園に日が暮れる迄隱れに行つたりした。

今から思つても、この時代ほど制作慾の爆發を來した事は私自身にも珍らしい。而かも種々雜多の詩風が一時に芽を出し、前後相交錯して、轉々して遂に俗謠の新體を創るに到つた。今、その當時の作品を類別すれば、

第一、以前よりひき續いた官能の象徵詩。

「雨の日ぐらし」「雪ふる夜のこころもち」等

第二、第一より轉化して、更に清新な印象詩となりたるもの。

「青い髯」「物理學校裏」「畜生」等

第三、第二より象徴の氣分を除いた、清新體の景物詩。

「五月」「六月」「銀座花壇」「新聞紙」等

第四、第三と同じ匂を有し、瀟洒なる歌、及小論。

「桐の花」の主要部分、「桐の花とカステラ」「植物園手記」等

第五、東京に江戸の情調を加味したる印象風の景物詩。

「雪の日」「雨あがり」「鬼百合」等

第六、同じく抒情的景物詩。

「花火」「水盤」「心中」「放埒」「紫陽花」等

第七、新俗謠體の小唄。

「片戀」「かるい背廣」「春の鳥」等

第八、新俗謠體より出でたる印象風の景物詩。

"CHONKINA" 等

第九、第七第八より生れたる抒情小曲集『思ひ出』の俗謠調。

「金の入日に繻子の黑」等

その他、『隣人』のごとき全く如上と別種のもの、或は『八月のすすりなき』の如き純抒情詩。

以上の如く、複雜して殆ど統一がない。

然し、ここに特筆大書して置きたいのはわが詩風に一大革命を惹

き起した『片戀』の一篇である。

あかしやの金と赤とがちるぞえな、
かはたれの秋の光にちるぞえな、
片戀の薄着のねるのわがうれひ、
曳舟の水のほとりをゆくころを、
やはらかな君が吐息のちるぞえな。
あかしやの金と赤とがちるぞえな。

私の後來の新俗謠詩は凡てこの一篇に萠芽して、廣く且つ複雜に進展して行つたのである。

『思ひ出』出版の契約が書肆と締結されたのもこの時である。『思ひ

出』の詩はその舊作『おもひで』『斷章』の二章を除き、殆ど、この以後約一ヶ年間の所作である事も知つてゐて貰ひたい。因に云ひ添へて置きたい事は、嚴密にこれ迄の私の歩いた道を振りかへれば、三つに別ける事ができる、第一は『邪宗門』の全部より本集中の同系の象徵風の詩、等に至る。第二は『桐の花とカステラ』式の詩と同型の桐の花の歌、第三は本集の新俗謠體の詩と『思ひ出』の殆ど全部等である。

却說、次の青山原宿時代（自四十三年九月到四十四年一月）は二三の俗謠詩の外、主として『思ひ出』の創作に耽つたものである。

次に私は家を疊んで木挽町の二葉館へ移つた。この時代（自四十四

年二月到四十四年十月）に愈私の俗謠體は發達して行つた、『薄あかり』『夜ふる雪』『柳の左和利』等がそれである。

その四月は『思ひ出』の序文が出來た。さうして凡てが完成されて、その集は五月に出版され、間もなく私は筋肉炎の爲めに蠣殼町の岩佐病院に入院して大手術を受けた。病後九月『思ひ出會』の招待を受け、十月には相州小田原へ療養のため轉地した。その頃はあまり作はない。『桐の花』の中に入れた僅の歌と、本集の『秋』その他位である。

雜誌『朱欒』を發刊したのはそれから歸京しての事である。飯田河岸の金原館時代（自四十四年十月至十二月）は之である。この時の作が『槍

持』『忠彌』その他種々凡て前に續いて俗謠調を主としてゐる。

その後に築地の新富座裏時代（自四十四年十二月至四十五年一月）が來る。『銀座の雨』『蕨』『キャベツ畑の雨』その他の詩がある。

次に母と妹の上京を機會に、弟と四人淺草聖天町（自四十五年二月至同年四月）に移る。この時は殆ど制作が無い。私はかの一女性との苦しい戀の爲めに狂氣の如くなつてゐたのである。

次で京橋の越前堀（自四十五年自大正一年四月）に移つた。六月に私は三木露風君と共に『朱欒』の特別號として詩集忽忘草を出した。その集に載せたのが『銀座の雨』の後半『黄色い春』『汽車はゆくゆく』『芥子の葉』等の詩である。之等の詩の上つ調子な事は、如何に戀に浮

かれてゐたとは云へ、今見ても耻かしいと思ふ。七月に私の戀愛事件が破綻して、私は急轉直下して涙の人となつた。翌年の春に至るまで、私は憔悴し、沈淪し、神經は狂ひ、心は荒れに荒れすさんだ。私は獨になり、私の前後四方は眞つ暗になつた。私は幾度か海を渡つて旅をした。苦しかつた。今思へば涙が垂れる。かの悲しい『桐の花』の哀傷篇はその時出來たのである。而して寂しい冬の間に『桐の花』の編輯が漸つと完成し、初めて市に出るやうになつた。

私はたゞ泣いて歌つた。

死なむとすればいよいよに
いのち戀しくなりにけり。
身を野晒になしはてて、
まことの涙いまぞ知る。

人妻ゆゑにひとのみち
汚しはてたるわれなれば
とめてとまらぬ煩悶の
罪のやみぢにふみまよふ。

この野晒の一篇がその時の私の生活の全部である。この詩は必ずこの集の增補に入る可きものでありながら、曩に『白金の獨樂』に收めて了つてある。それで今改めて、ここに轉載して置く。

尙、今回增補した『綠の種子』中の三四篇は同じ頃のもので、その他はいろいろの時代の殘りものである。

その間に愈國から季の弟や從弟や續いて家を失つた父や從妹が上京して更に生活が苦しくなり、五月のはじめ、終に前陳の如く、家をあげて三崎へ渡つた。

『雪と花火』の前身東京景物詩はその後數ヶ月を經て、やつと上梓の餘榮に浴したものだ。本來は『思ひ出』よりも先きに世に出づ可き筈のものであつたのである。

ああ、東京、東京、その名を呼ぶさへ私は涙が流れる。三崎から小笠原へ、小笠原からまた東京の麻布へ、東京から、また葛飾の茄子

や胡瓜の畑の中へ、かくして一年二年三年四年、私は流離して留まるところを知らない。而して私の身邊も二人から一人になり、また新らしい外の二人の生活が開けて來た。江戸川の水のほとりに佇む時、蓮田の向うに幽かに煙があがるのは東京ではないか、東京の空はここから眺めても夜は明るい。私はまた何時東京へ歸ることやら。

大正五年七月　　南葛飾紫烟草舍にて

白　秋　識

大正五年六月二十日印刷
大正五年七月一日發行

著者　北原白秋

發行者　東京市日本橋區檜物町九番地　西村寅次郎

印刷人　東京市京橋區新榮町一丁目廿一番地　佐藤保太郎

印刷所　東京市京橋區新榮町一丁目廿一番地　文祥堂印刷所

不許複製

發行所　東京市日本橋區檜物町九番地　東雲堂書店
振替東京五六一四番
電話本局一八七一番

雪と花火をはり

T
TOKIO